

第242図 2号竖穴建物跡

第243図 2号竖穴建物跡出土遺物

2号竖穴建物跡 (第242図)

C-34区、III b層で検出した。形状は、長軸約253cm×短軸約200cmの長方形である。検出面からの深さは約60cmを測る。壁面にそって9基のピットを検出した。このピットの径はいずれも約6cm前後で、検出面からの深さは約20cm～約25cmで最深部は、杭状に尖っている。この構造の埋土も他の竖穴構造同様、II b層を主体としており、埋土の堆積状況は、レンズ状の自然堆積というよりは、色調、土質に大差がないことから、短期間に人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。2号竖穴遺構からは、糸切り底部の土師器壺が出土した。この遺構の時期は中世であると考える。

2号竖穴建物跡出土遺物 (第243図 1)

1は土師器の壺である。内面、外面の器面調整は、丁寧なナデである。底面は、糸切り状の痕跡がみられるが、丁寧にナデ消してある。

3号竪穴建物跡（第244図）

B-34・35区、IIb層で検出された。4号竪穴建物跡と切り合い関係にある。形状は、長軸約217cm×短軸約226cmの長方形であり、検出面からの深さは約65cmである。長軸は南北方向である。この遺構の中心部からやや東寄りに約60cm×約30cmの楕円形の範囲で、炭化物が集中する箇所があるが、特に掘り込みは持たない。炭化物が残存する部分は面的に広がっており、被熱によって赤色化した焼土域が見られる。遺構からは壁面にそってやや等間隔に並ぶ7基のピットが検出された。このピットの検出面からの深さは約30cm～40cmで、最深部が杭状に尖っているものもある。また、ピット1は、他のピットと比較して形状が大きく、埋土中に人為的に掘り込まれた様子が、明瞭にわかる。これらのことから、3号竪穴建物跡に伴う柱穴の可能性が高いと考えられる。埋土の堆積状況は、IIb層を主体とし、IIIa層やIV層の埋土がブロック状に混入している。この中に、炭化物もまばらに含まれる。埋土の堆積状況は、各層とも構成がほぼ同じであることから、短期間のうちに埋め戻された可能性が高いと考えられる。本遺構内から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、炭素年代測定の結果は、較正年代で13～16世紀となる（詳細は別項の科学分析の項で後述）。

4号竪穴建物跡（第245図）

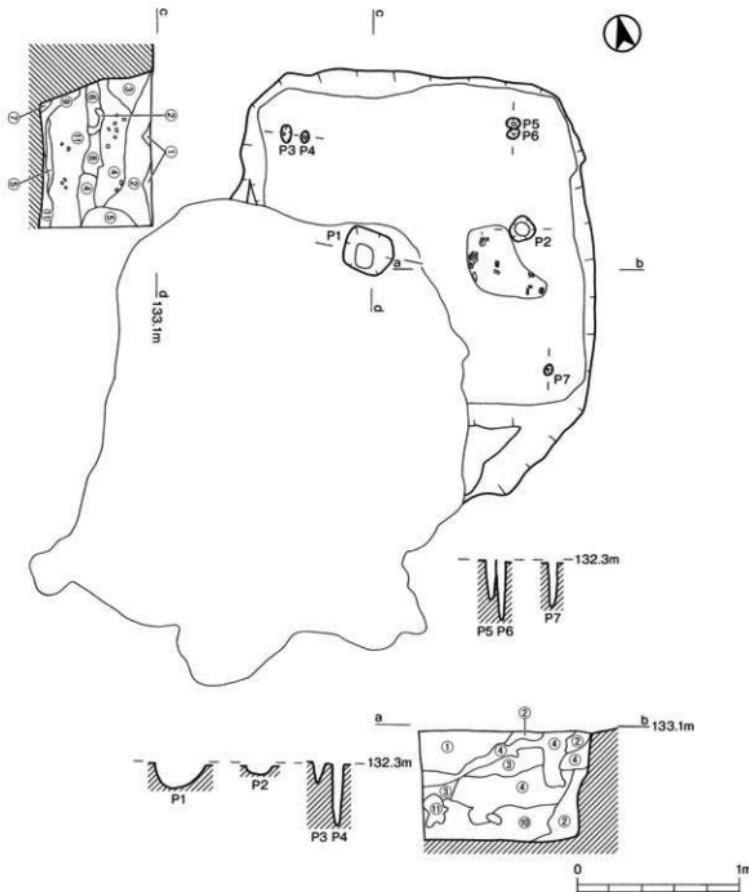
B-35区、IIb層で検出された。形状は、長軸約290cm×短軸約224cmの方形であり、長軸は南北方向である。検出面からの深さは約80cmである。床面中央部に焼土があり、炭化物が堆積していた。南側が階段状になっており、この部分は入り口の可能性が考えられる。壁面にそってやや等間隔に並ぶ8基のピットが検出された。このピットの検出面からの深さは約17cm～43cmである。本遺構の埋土はIIb層を主体としており、埋土の堆積状況はレンズ状の自然堆積というよりは、埋土の色調・土質に大差がないことから、短期間に人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。3号竪穴建物跡と切り合い関係にあり、4号建物跡が3号を切っているので、4号竪穴建物跡がより新しいと考えられる。

この竪穴建物跡から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、該当時期が較正年代で13世紀～16世紀となるという結果が得られた（詳細は別項の科学分析の項で後述）。

出土遺物は、白磁片や陶器片が出土した。これらの出土遺物から本遺構は中世後半頃のものであると考えられる。遺物は、接合作業等を経て5点を図化した。

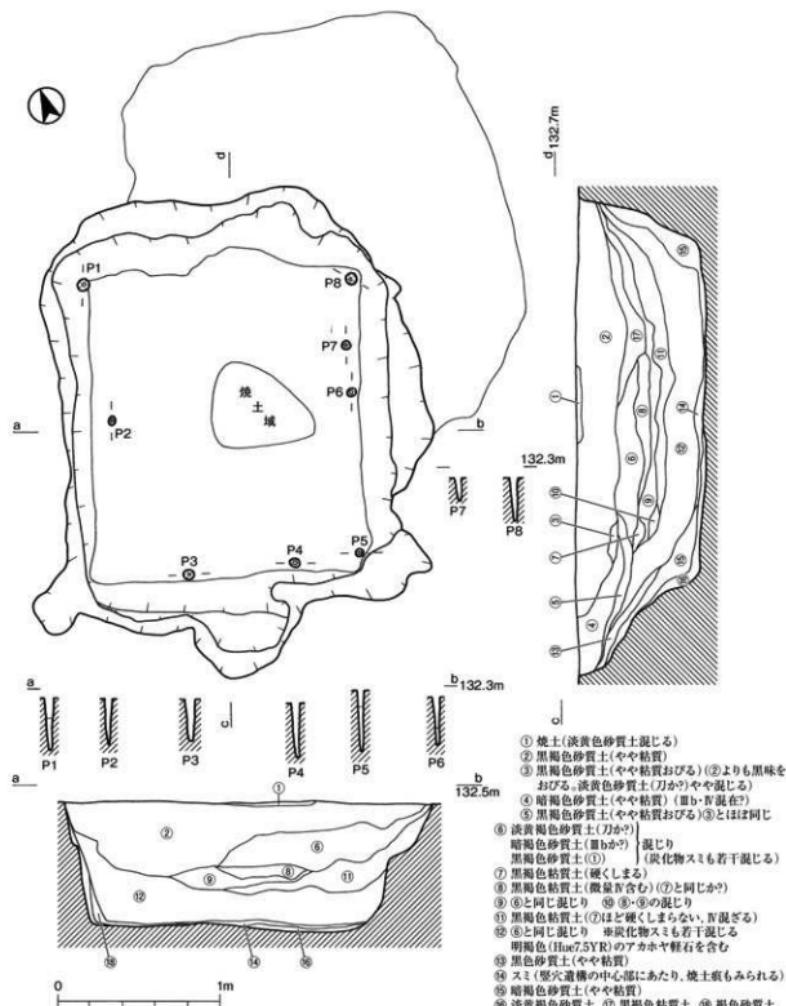
4号竪穴建物跡出土遺物（第246図 1～4）

1は白磁皿である。底部の釉薬の掛かり方や胎土からして太宰府分類の白磁皿IX類（口禿皿）の可能性がある。時期は、太宰府編年F期（13世紀中頃～14世紀初等）のものであると考えられる。2は常滑焼の甕の胴部である。3は備前焼に類似する擂鉢の口縁部である。口縁部形態の特徴から（口縁下角の垂下が顕著で、小さくシャープである等の特徴）、乘岡編年で中世5期（間壁編年IVB期後半）に該当するもので、15世紀後半頃の年代が想定される。ただし、形態は備前焼に類似するものの、焼成は酸化が強く色調が赤色を呈するもので、備前焼と異なる可能性がある。器面調整はナデである。4は古銭である。銘が判然としないので、名称は不明である。

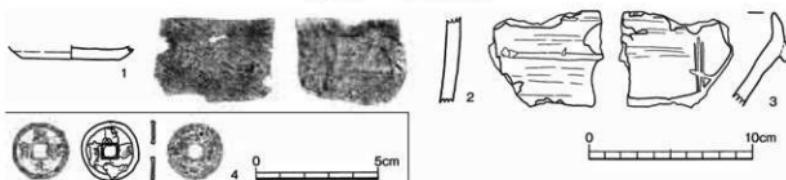


第244図 3号竪穴建物跡

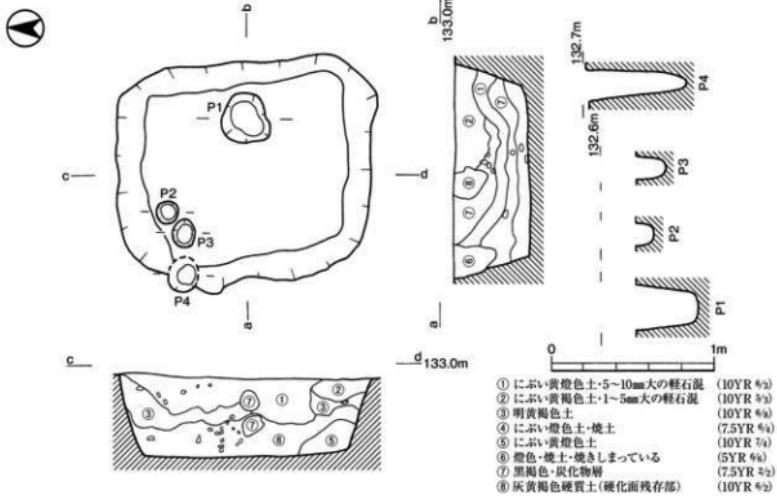
- | | |
|--|--|
| ① 黄褐色砂質土に、ないし黄褐色砂質土を混じり
に、ないし黄褐色砂質土上に炭化物を含む者 | ⑦ 暗褐色砂質土(國くする) |
| ② に、ないし黄褐色砂質土上に炭化物を含む者 | ⑧ に、ないし黄褐色砂質土 |
| ③ に、ないし黄褐色砂質土上に暗褐色砂質土の混じり
に、ないし黄褐色砂質土上に褐色の「ミズ多」を含む者 | ⑨ 暗褐色砂質土に、ないし黄褐色砂質土の混じり
暗褐色砂質土に、ないし黄褐色砂質土を含む者 |
| ④ に、ないし黄褐色砂質土上に炭化物を含み固くしまる
暗褐色砂質土に、ないし黄褐色砂質土を含む者 | ⑩ 暗褐色砂質土(貯質) |



第245図 4号竖穴建物跡



第246図 4号竖穴建物跡出土遺物



第247図 5号竖穴建物跡

5号竖穴建物跡 (第247図)

C-35区、IIb層で検出された。形状は、長軸約155cm×短軸約130cmの隅丸方形である。長軸は南北方向である。検出面からの深さは約45cmを測る。この遺構からは、4基のピットが検出された。P1～3の直径は約10cm～30cmである。ただし、他の竖穴建物跡から検出されたピットとは、配列も形状も異なっている。そのため、このピットが竖穴建物跡に伴うものかどうかは不明である。埋土の堆積状況は、IIb層を主体とし、IIIa層の埋土がブロック状に混入する。この中に、炭化物もまばらに含まれている。埋土の堆積状況は、各層とも構成がほぼ同じであることから、短期間のうちに埋め戻された可能性が高いと考えられる。床面直上からの出土遺物は確認されなかった。

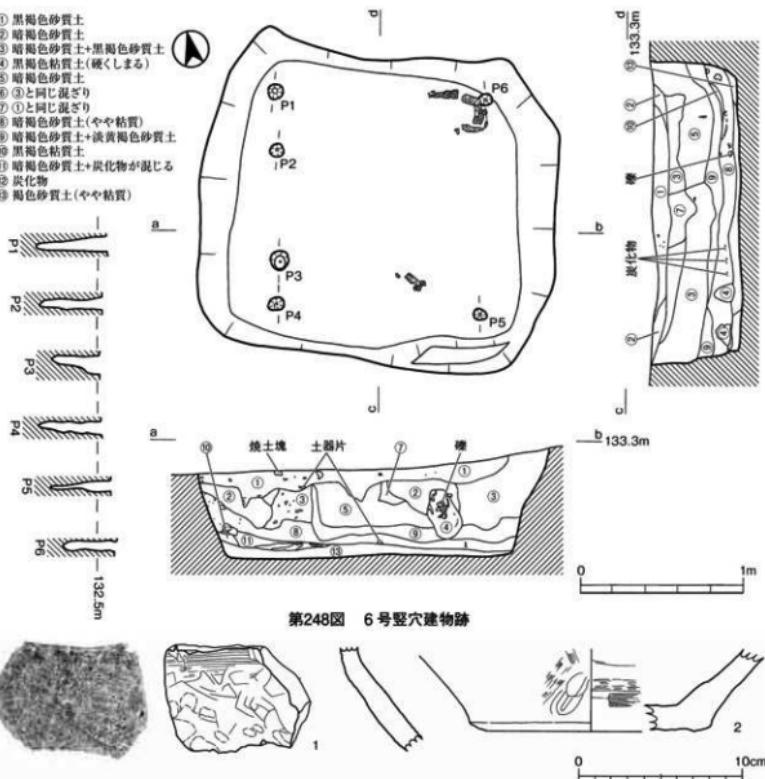
6号竖穴建物跡 (第248図)

B-36区、IIb層で検出された。形状は、長軸約217cm×短軸約185cmの長方形である。長軸は、東西方向である。検出面からの深さは、約50cmである。壁面にそって6基のピットが検出された。このピットの径はいずれも約10cm前後で、検出面からの深さは約30cm～40cmである。最深部は、杭状に尖っている。ピットの埋土は、やや硬くしまっているものや、炭化物が混入するもの等多様である。

ピットは、西側壁面に沿って直線的に並ぶように配列してある。この遺構の埋土は、IIIb層を主体としており、埋土の堆積状況は、レンズ状の自然堆積ではなく、埋土の構成は色調や土質に大差がないことから、短期間に人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。この遺構から大きな炭化材が出土している。この状況では、上部の家屋が焼失して炭化したのか、炭を貯蔵していたのか判断はできない。本遺構から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、該当時期が較正年代で13～16世紀となるという結果が得られた。(詳細は別項の科学分析の項で後述)

遺物は2点を図化した。これらのことから考えても、6号竖穴建物跡の時期は中世後半頃であると想定される。

- ① 黒褐色砂質土
- ② 暗褐色砂質土
- ③ 暗褐色砂質土・黒褐色砂質土
- ④ 黒褐色粘質土(硬くしまる)
- ⑤ 黒褐色砂質土
- ⑥ ③と同じ凝り
- ⑦ ④と同じ凝り
- ⑧ 暗褐色砂質土(やや粘質)
- ⑨ 暗褐色砂質土・淡黄褐色砂質土
- ⑩ 黑褐色粘質土
- ⑪ 暗褐色砂質土・炭化物が混じる
- ⑫ 炭化物
- ⑬ 黄褐色砂質土(やや粘質)



第248図 6号竪穴建物跡

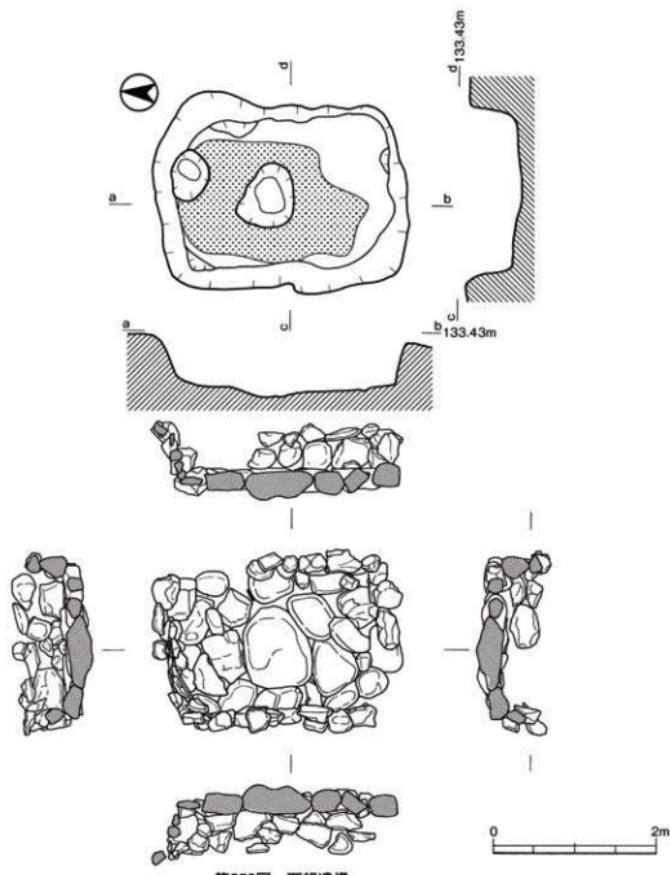
第249図 6号竪穴建物跡出土遺物

6号竪穴建物跡出土遺物(第249図 1, 2)

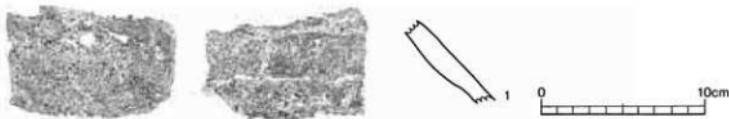
1・2は、備前の甕である。1は甕の肩部～頸部で、本遺跡出土の備前の中では比較的古い様相を持つものである。2は、甕の底部である。いずれも小型～中型のものであると考えられる。

第63表 挖立柱建物跡・竪穴建物跡・石組遺構出土遺物観察表

件名	遺物名	番号	種別	岩種	口径		底径		高さ		調整・文様		備考
					cm	cm	cm	cm	cm	cm	外側	内側	
231	圓立3	1	宋銭	—							—	—	天蓋通寶
234	圓立5	1	青磁	环	11.3		3.8		3.5		—	—	—
238	圓立8	1	宋銭	—							—	—	—
241	竪穴建物跡1	1	須彌器	不明	—	—	—	—			焰子目タタキ	—	—
243	竪穴建物跡2	1	土器器	井	9.2		8		2		丁寧なナデ	摩耗	底面丸切り
246	竪穴建物跡4	1	白磁	皿	—	—	6	—	—	—	—	—	口壳
		2	常滑焼	甕	—	—	—	—	—	—	—	—	脚部
		3	陶器	罐	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		4	宋銭	—							—	—	—
249	竪穴建物跡6	1	田産陶器	甕	—	—	—	—	—	—	摩耗	ナデ	—
	2	田産陶器	甕	—	—	—	14.8	—	—	—	—	—	—
251	石組遺構	1	常滑焼	甕	—	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—



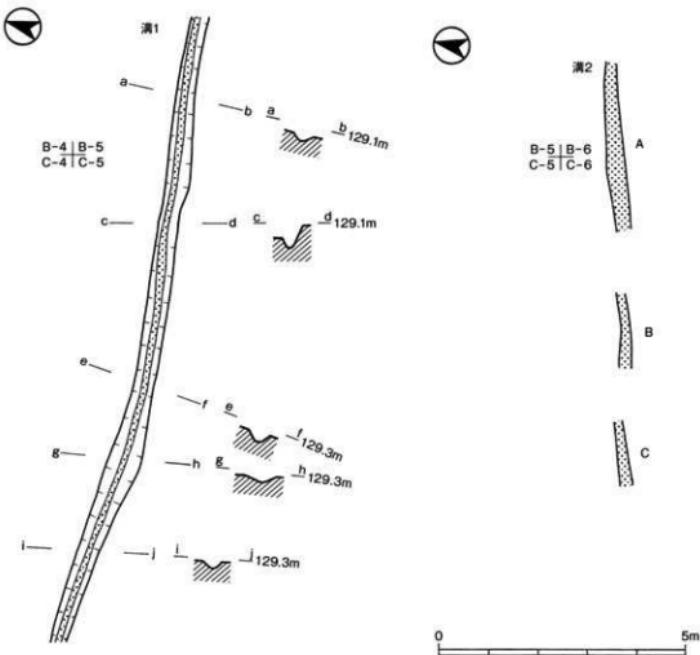
第250図 石組遺構



第251図 石組遺構出土遺物

石組遺構

B-34区、IV層上面で検出した。長軸約310cm×短軸約210cmの長方形に拳大の石を組む遺構である。掘り上げ過程において、中心部の石が散乱しているのを確認することができた。石の表面に黒色化した焦げた部分を確認することができ、何らかの被熱を受けたことを窺わせる。本遺構の埋土中より、14~15世紀の頃のものと考えられる常滑焼の陶器片が出土している。この遺構の性格は、他の地域の類例から火葬施設や埋葬遺構、水溜遺構、トイレ遺構などの可能性があるが、いずれも明確でなく結論づけることはできない。



第252図 中世溝状遺構(1)

溝状遺構(第253図~259図)

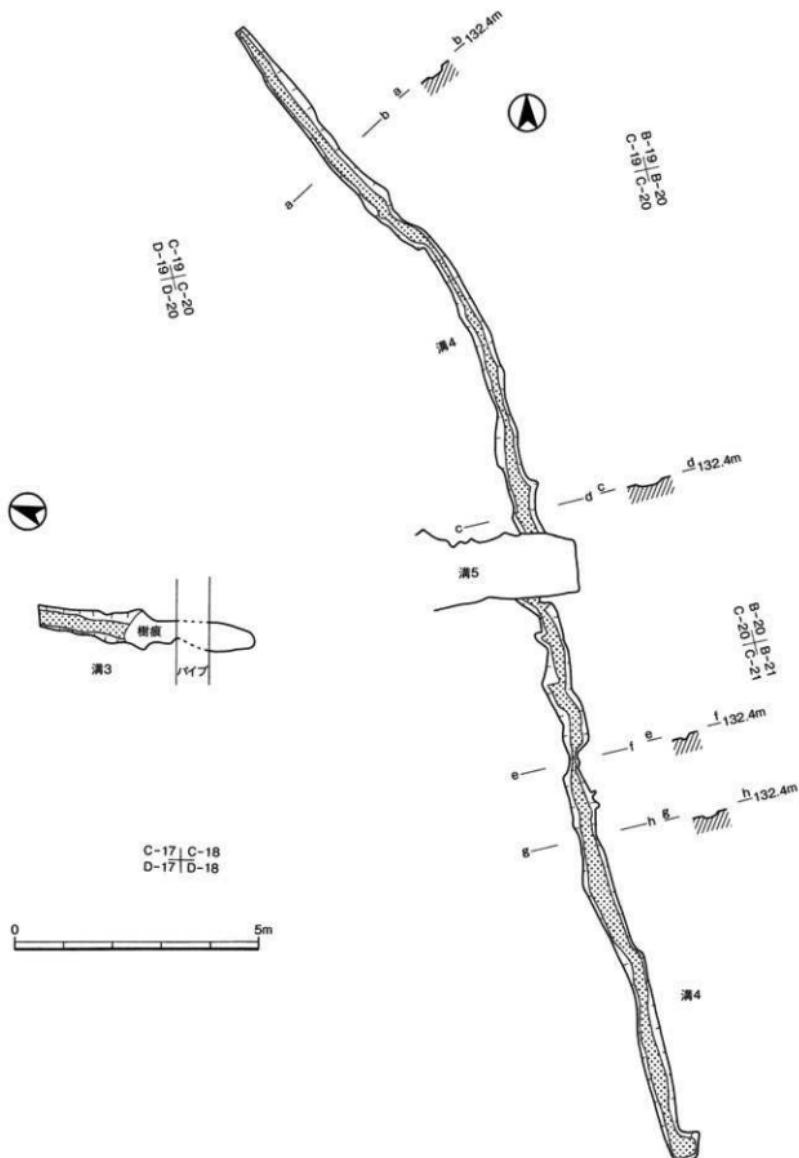
中世の時期に相当する溝状遺構は12条検出された。これらは、主軸が東西もしくは南北方向に向いているものがほとんどである。

1号溝状遺構は、B・C-5区、IIb層で検出された。幅は約40cm~70cm、総延長約13m、深さ約10cm~20cmを測る。

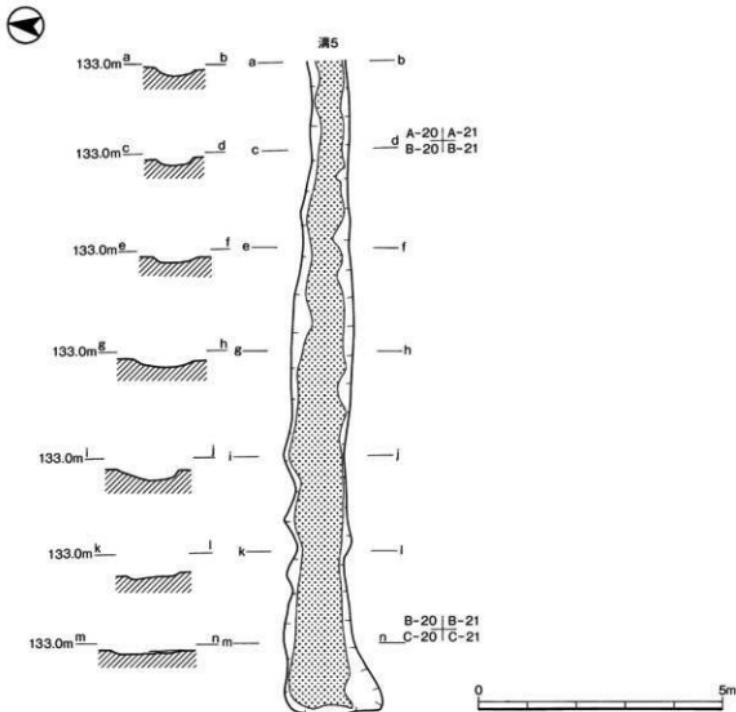
2号溝状遺構は、B・C-6区、IIb層で検出された。3つに分割された状態で検出されたが、ほとんど一直線上にあると考えられるため、一つの溝とした。総延長は、約9mで、分断された一つ一つの溝を東の方からA・B・Cとした。Aの全長は約350cm、Bの全長は約150cm、Cの全長は約130cmである。A・B・Cともに硬化面が見られる。

3号溝状遺構は、C-17・18区、IIb層で検出された。東西方向にベルトを設定して掘り下げを行った。幅は約30cm~60cm、総延長約440cm、深さ約10cm~15cmを測る。溝の北側は途中で切られている。実際には、北側へさらにもう伸びていたと考えられる。溝の中央より南側半分は樹根のためはっきり確認できないが、溝の終わりの部分が確認できる。

4号溝状遺構は、C-19・20区、IIb層で検出された。東西方向にベルトを設定して掘り下げを行った。幅は約20cm~50cm、総延長約18m、深さ約3cm~10cmを測る。4号溝状遺構は5号溝



第253図 中世溝状遺構(2)



第254図 中世溝状遺構(3)

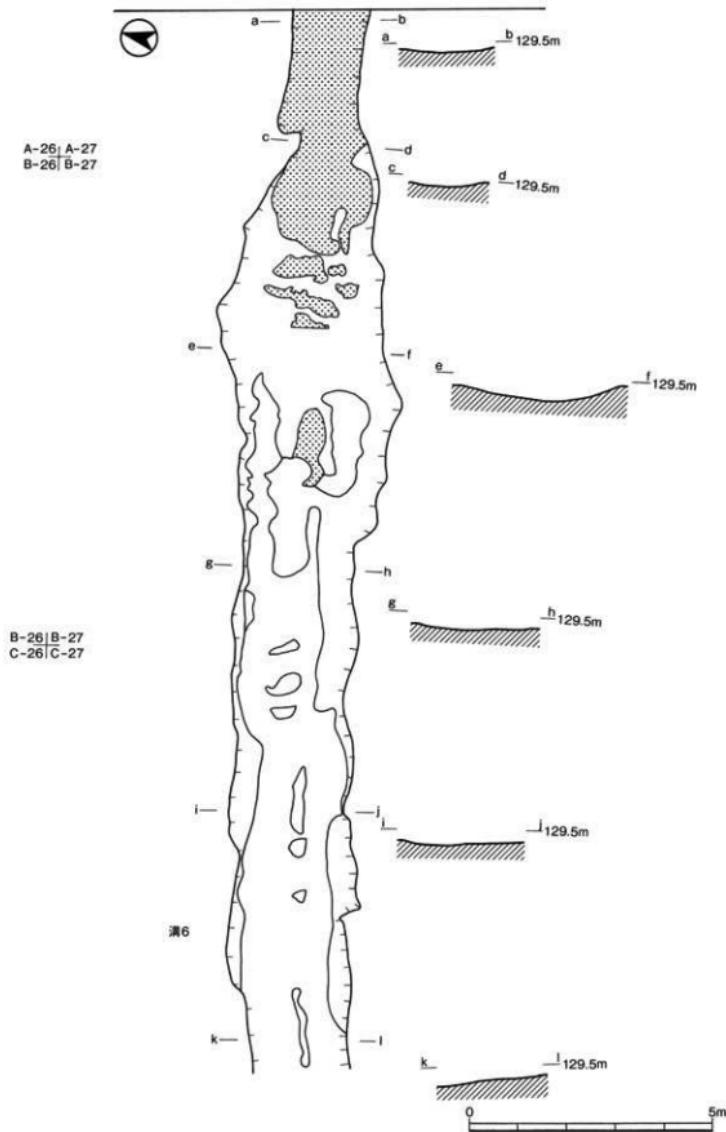
状遺構に切られている。

5号溝状遺構は、A～C-20区、IIb層で検出された。東西方向にベルトを設定して掘り下げを行った。幅は約80cm～150cm、総延長約18m、深さ約5cm～13cmを測る。5号溝状遺構は、4号溝状遺構を切っている。北側、中間、南側の3か所が切られていてはっきりしない。埋土は、IIIa層に相当する暗褐色土でやや粘質がある。埋土中の遺物は、ほとんどが成川式土器の小片である。

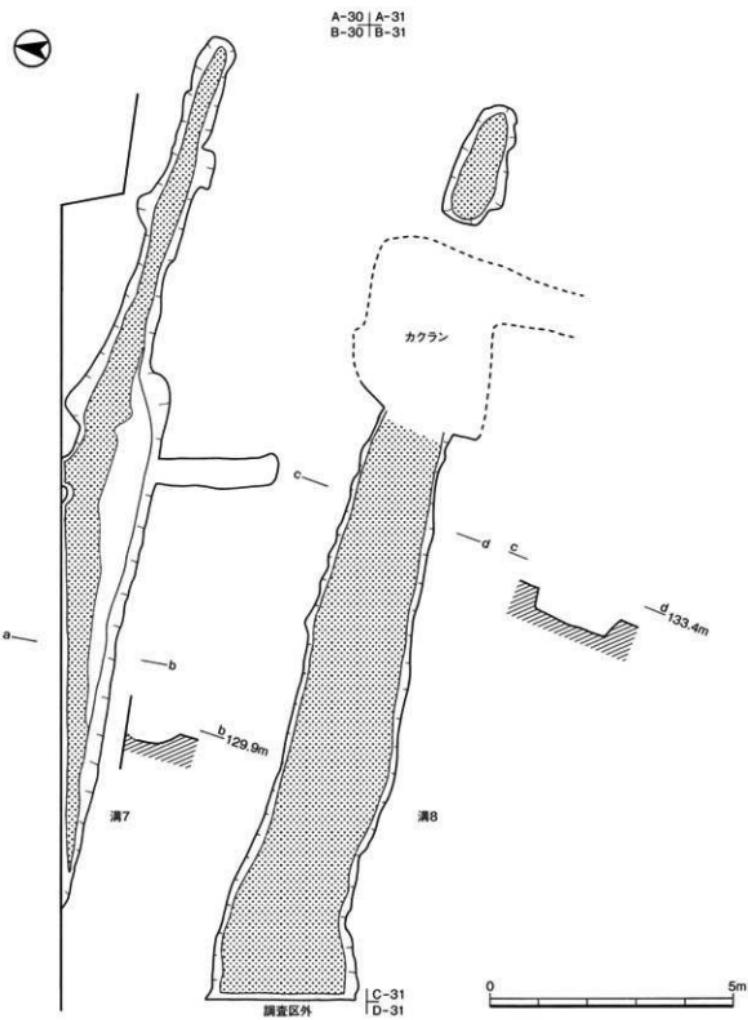
6号溝状遺構は、A～C-27区、IIb層で検出された。東西方向に走っている。幅は約150cm～350cm、総延長約21m、深さ約10cm～40cmを測る。溝の中心付近は土が所々硬くなっている。

7号溝状遺構は、B-30区、IIb層で検出された。南北方向にベルトを設定して掘り下げを行った。幅は約60cm～200cm、総延長約18m、深さ約10cm～45cmを測る。北壁は、削平を受けていたため立ち上がりがはっきりしない。中央より東側は幅が約60cm～70cmと狭く、西側は約200cmと広い。

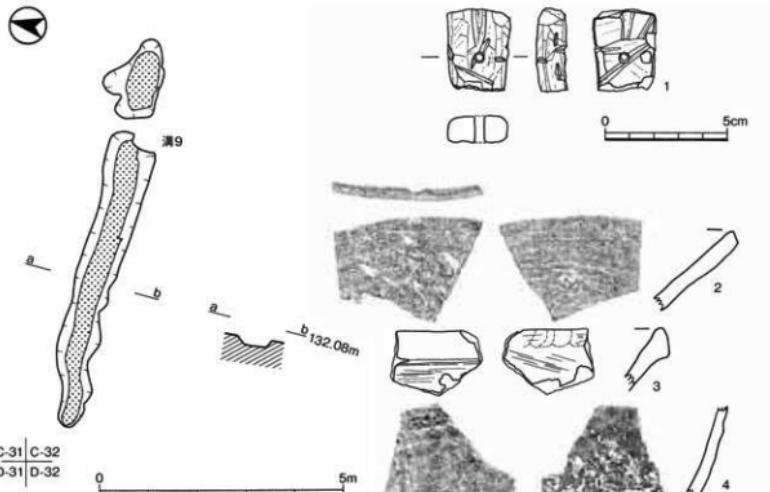
8号溝状遺構は、B・C-30・31区、IIb層で検出された。西側は調査区外のため調査することができなかった。南北方向にベルトを設定して掘り下げを行った。幅は約100cm～300cm、総延長約19m、深さ約10cm～80cmを測る。



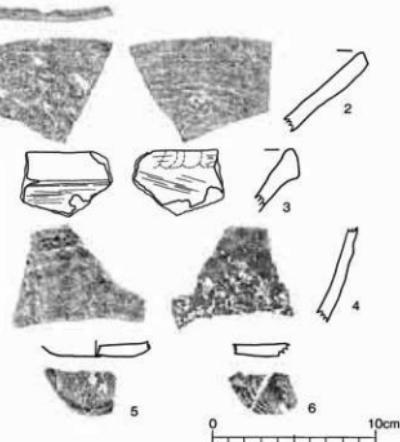
第255図 中世溝状遺構(4)



第256図 中世満状遺構(5)



第257図 中世溝状遺構(6)

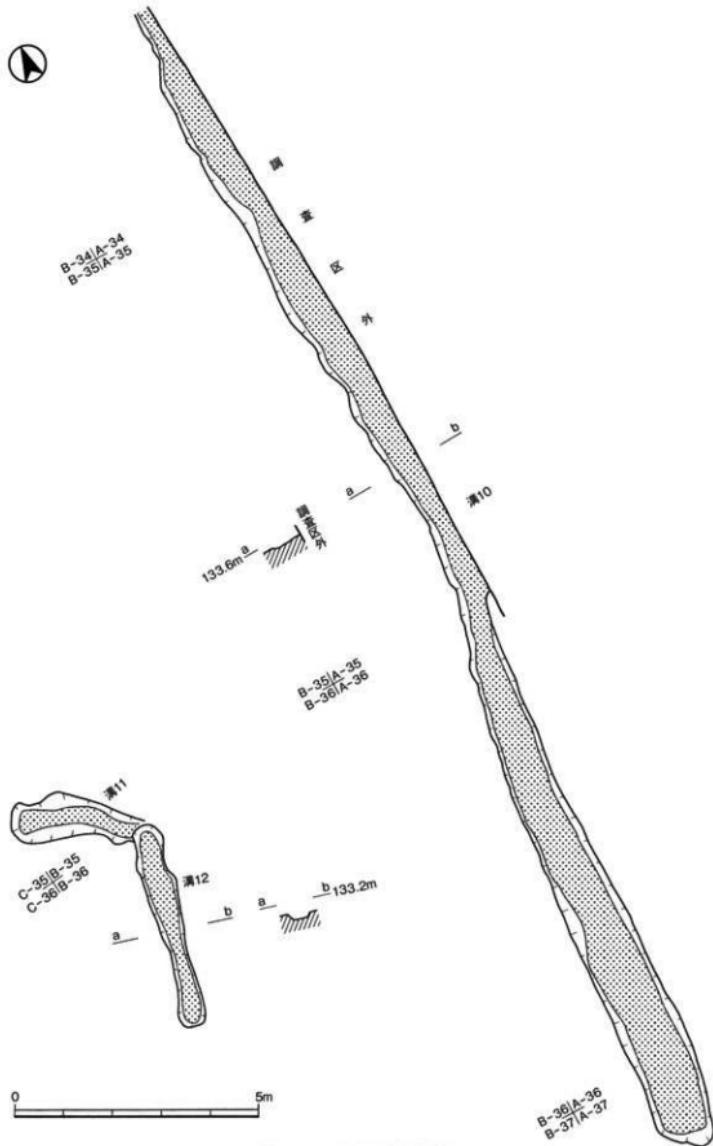


第258図 中世溝状遺構出土遺物

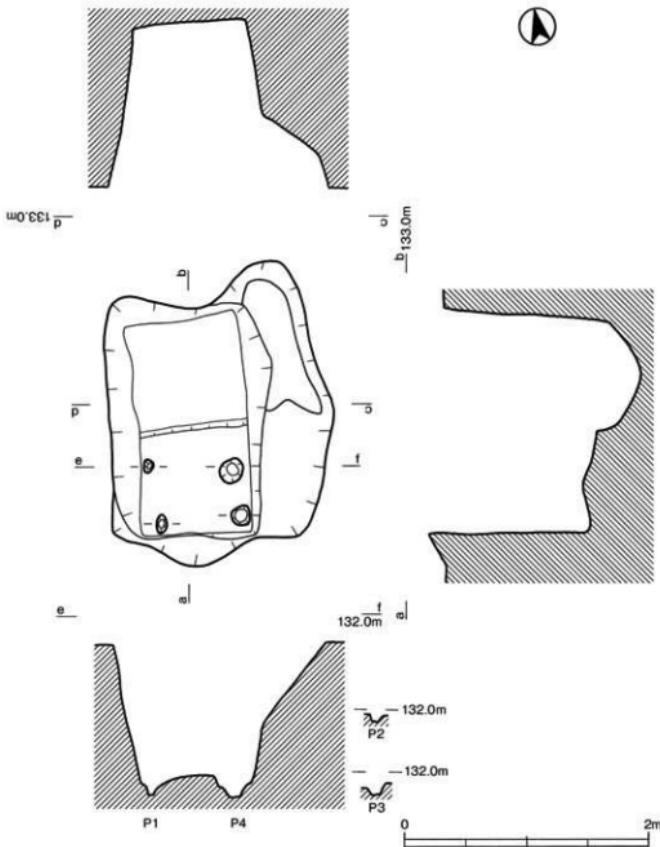
9号溝状遺構はC-32区、II b層で検出された。東西方向に走っている。幅は、約50cm~100cm、総延長約8m、深さ約10cmを測る。南側の一部は、畑地灌漑のパイプで切られている。埋土はII a層の黒褐色土である。10号溝状遺構は、A-34~37区、II b層で検出された。南北方向に走っている。幅は、約50cm~130cm、総延長約26m、深さ約2cm~20cmを測る。中央より北側半分は切られておりはっきりと分からない。11号溝状遺構は、B-35・36区、II b層で検出された。東西方向に走っている。幅は、約50cm~90cm、総延長約2m60cm、深さ約5cm~20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、炭化物を含む。12号溝状遺構はB-36区、II b層で検出された。南北方向に走っている。総延長約4mを測る。

第64表 中世溝状遺構内出土遺物観察表

辨認	遺構名	番号	種別	器種	部位	調整・文様		色調		備考
						外面	内面	外面	内面	
258	中世溝状遺構	2	陶器	鉢	口縁部	—	—	灰	灰	—
		3	陶器	鉢	口縁部	—	—	—	—	—
		4	陶器	—	胴部	—	—	—	—	—
		5	土器	甕	底部	ナテ	ナテ	浅黄褐	浅黄褐	底面角切り
		6	土器	甕	底部	ナテ	ナテ	浅黄褐	浅黄褐	底面角切り
辨認	遺構名	番号	岩種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	
					cm	cm	cm	kg		
258	中世溝状遺構	1	錘	滑石	3.4	2.6	1.2	16.62	—	



第259図 中世溝状遺構(7)



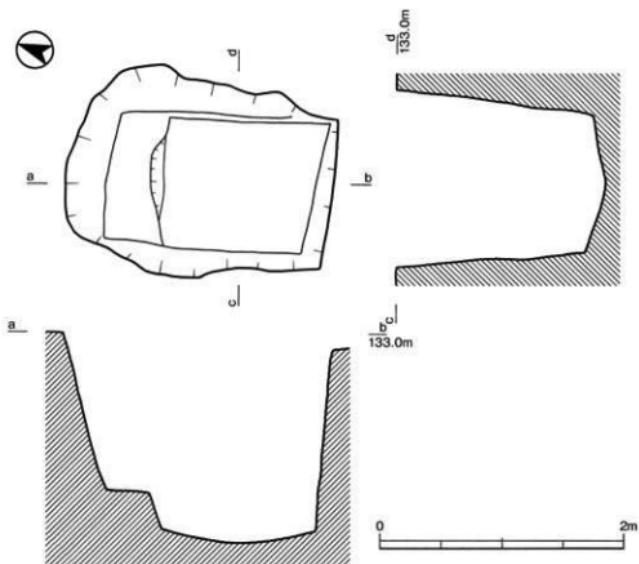
第260図 土坑墓 1

土坑墓

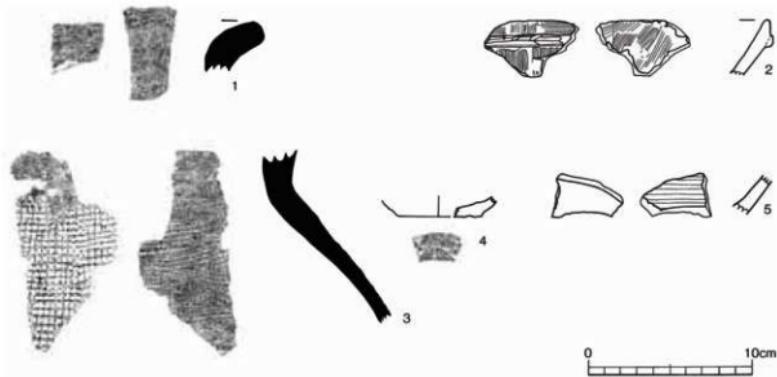
中世以降の調査で、土坑墓に類似した遺構が検出された。人骨等は確認されていないので墓でない可能性も含むものもあるが、ここではその形態から墓として取り扱う。

土坑墓 1 (第260図)

C-33区、IIb層で検出された。平面形は、長軸約210cm×短軸約190cmの長方形である。埋土は、中世の包含層と同じ、黒褐色砂質土である。検出面からの深さは、約160cmである。この遺構の南側には、径約20cmのピットが4基確認された。ピットの間隔は、長い部分で約80cm、短い部分で約40cmである。先端は杭状になっていた。



第261図 土坑墓2

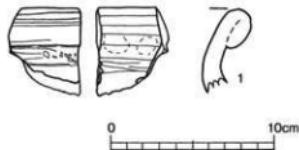
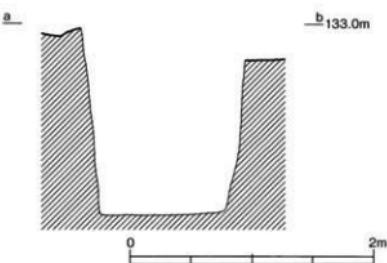
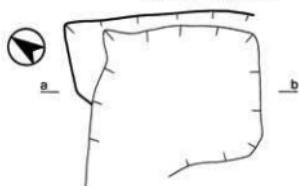
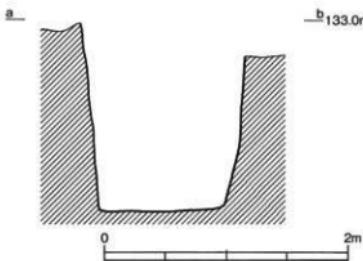
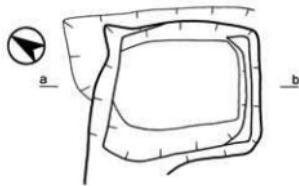


第262図 土坑墓2出土遺物

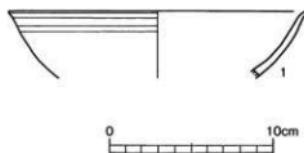
土坑墓2(第261図・262図 1~5)

C-33区、IIb層で検出された。平面形は、長軸約120cm×短軸約130cmの長方形である。

検出面からの深さは、最深部で約160cmを測る。掘り下げるに、北側から南側にかけて一段下がっていることが確認できた。本造構から、中世須恵器(櫛万丈系)壺(1・3)・白磁壺(5)等の遺物が出土した。



第264図 土坑墓 3 出土遺物



第265図 土坑墓 4 出土遺物

土坑墓 3 (第263図・264図 1)

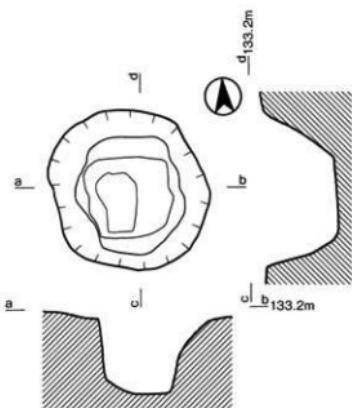
B-32区、IIb層で検出された。平面形は、一辺が約140cm×約100cmの長方形である。検出面からの深さは、最深部で約150cmである。埋土は暗褐色砂質土である。遺構内から備前の大甕の口縁部が出土している。

口縁部は扁平化した玉縁状で、中世後半の特徴を示す。

土坑墓 4 (第265図・266図 1)

B-32区、IIb層で検出された。平面形は、長軸約160cm×短軸約70cmの長方形であるが、西側を土坑墓3に切られている。遺構内から白磁碗が出土している。

太宰府編年の白磁碗VI類に類似する。時期はC期で11世紀後半～12世紀前半に該当する。



第267図 土坑墓 5

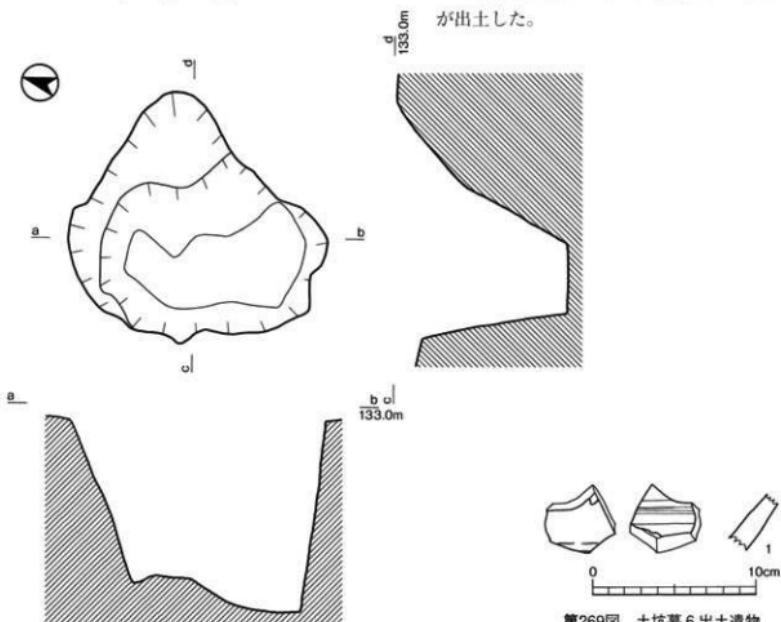
土坑墓 5 (第267図)

B-32区、IIb層で検出された。平面形は、長軸約140cm×短軸約130cmの楕円形である。東側の掘り込みが浅く、検出面からの深さは、約40cmで、西側の掘り込みが約80cmで一段深い。埋土は単一の暗褐色砂質土である。

土坑墓 6 (第268図・269図 1)

B-32区、IIb層で検出された。平面形は、長軸約200cm×短軸約180cmの方形である。

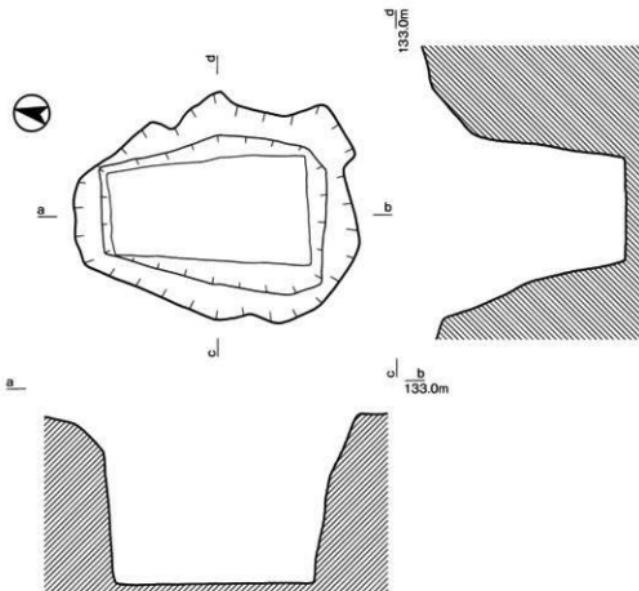
土坑墓 5と同様に、東側の掘り込みが浅く、検出面からの深さは、約50cmで、西側の掘り込みが約10cmで一段深い。埋土は単一の暗褐色砂質土である。遺構内から白磁が出土した。



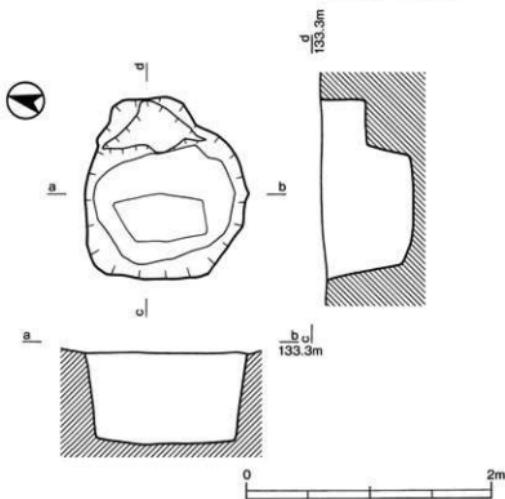
第269図 土坑墓 6 出土遺物



第268図 土坑墓 6



第270図 土坑墓 7



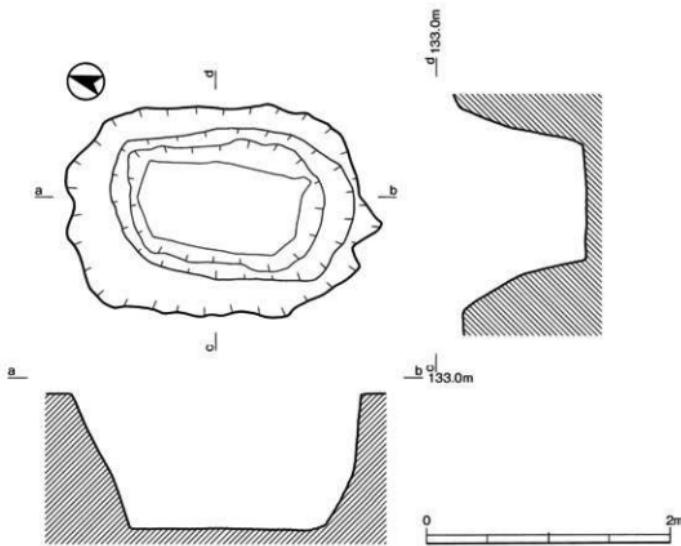
第271図 土坑墓 8

土坑墓 7 (第270図)

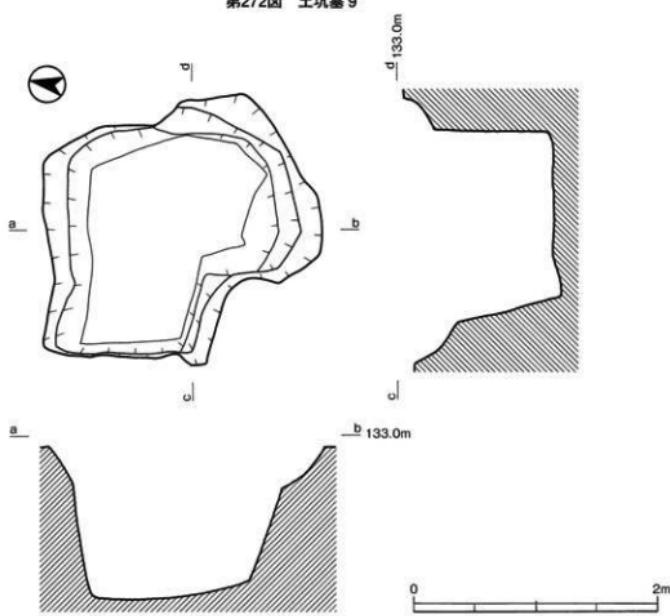
C-33区、IIb層で検出された。長軸約220cm×短軸約190cmで北側がやや南側に比べて細く舟形を呈している。中央部に一辺が約160cm×約80cmの長方形のプランが確認された。

土坑墓 8 (第271図)

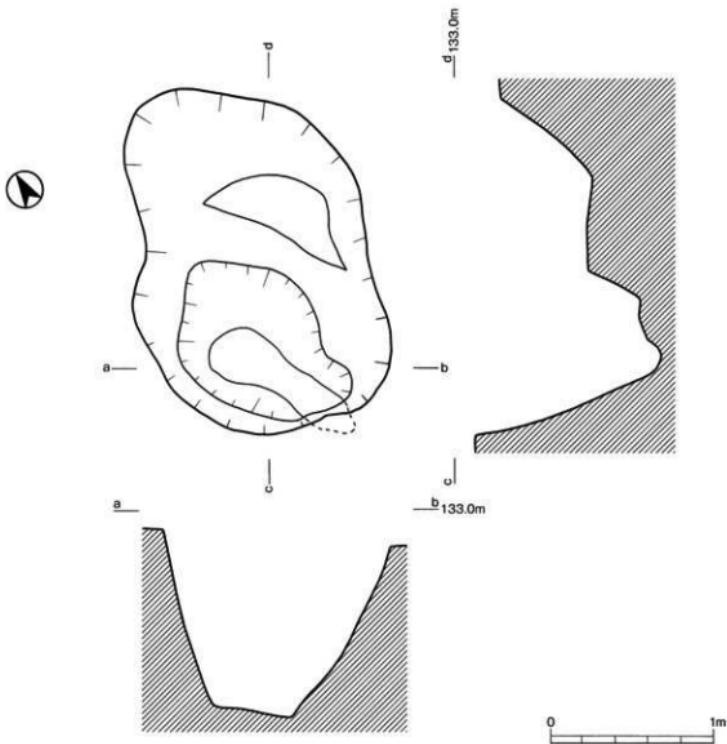
C-33区、IIb層で検出された。平面形は、直径約140cmの真円である。検出面からの深さは約60cmである。埋土は単一の暗褐色砂質土である。



第272図 土坑墓9



第273図 土坑墓10



第274図 土坑墓11

土坑墓9(第272図)

C-33区、II b層で検出された。長軸約220cm×短軸約200cmの不定形を呈する。埋土は、黒褐色土暗褐色土の粘質土である。

土坑墓10(第273図)

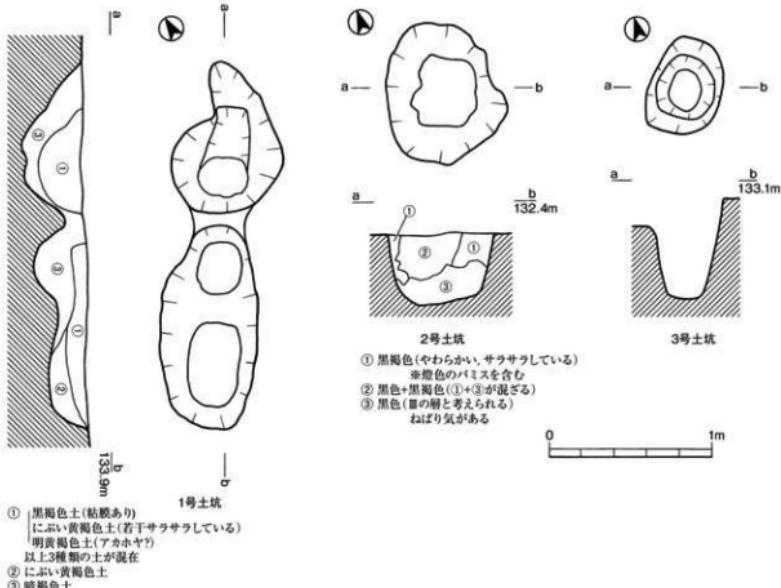
C-33区、II b層で検出された。長軸約270cm×短軸約170cmの長方形を呈する。検出面では、埋土の色の違いを確認できたが、掘り下げていくと黒褐色土、暗褐色土等が混入していた。

土坑墓11(第274図)

B-32区、II b層で検出された。長軸約180cm×短軸約200cmの不定形を呈する。埋土は掘り下げていくと黒褐色土、暗褐色土等が混入していた。

土坑墓内出土遺物(第262図 1~5)

1は樺万丈系須恵器の壺の口縁部である。2は滑石製石鍋の欠損品である。鉗が観察される。3は樺万丈系須恵器の壺の胴部である。外面は格子目タタキで、内面は當て具痕をナデ消している。4は底部に糸切り痕がある土師器の壺である。5は白磁の壺の胴部である。内面にロクロ目が残る。



第275図 土坑(1)

土坑(第275図~280図)

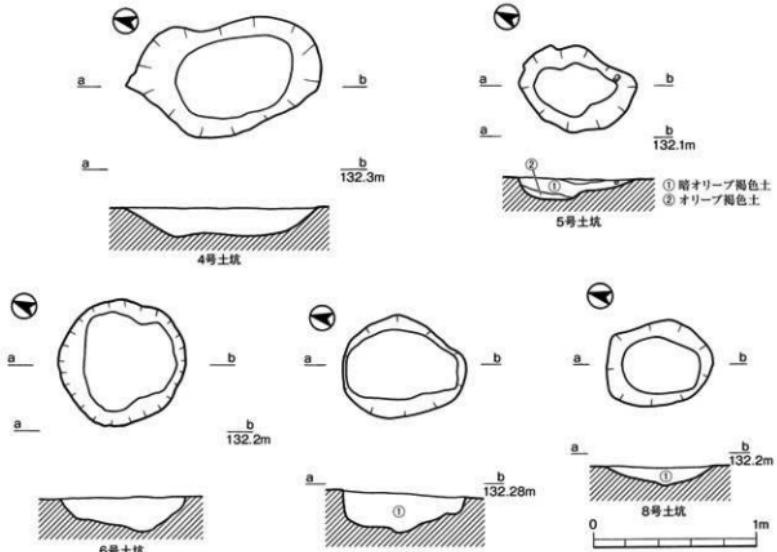
中世~近世にかけての調査で、土坑が合計24基検出された。埋土は、単色のものが多いのが特色である。

9号土坑

C-31・32区で検出された。平面形は長軸約140cm×短軸約104cmで検出面からの深さは約110cmを測る。遺構内炭化木の年代測定の結果、較正年代で13~15世紀であった(詳細は別項)。

第65表 土坑観察表(1)

土坑名	長軸(cm)	短軸(cm)	形状	深さ(検出面より)cm	備考
1号	230	60	不定形	40	—
2号	80	70	椭円	45	—
3号	60	45	椭円	60	—
4号	120	70	椭円	20	—
5号	70	55	椭円	12	—
6号	80	60	円	20	—
7号	75	60	椭円	24	—
8号	65	50	椭円	10	—
9号	140	104	不定形	110	—
10号	90	48	椭円	90	西側は調査区外
11号	75	68	不定形	20	—
12号	85	75	不定形	60	—
13号	110	60	椭円	20	—
14号	320	110	楕丸形	20	—
15号	140	140	円	10	—



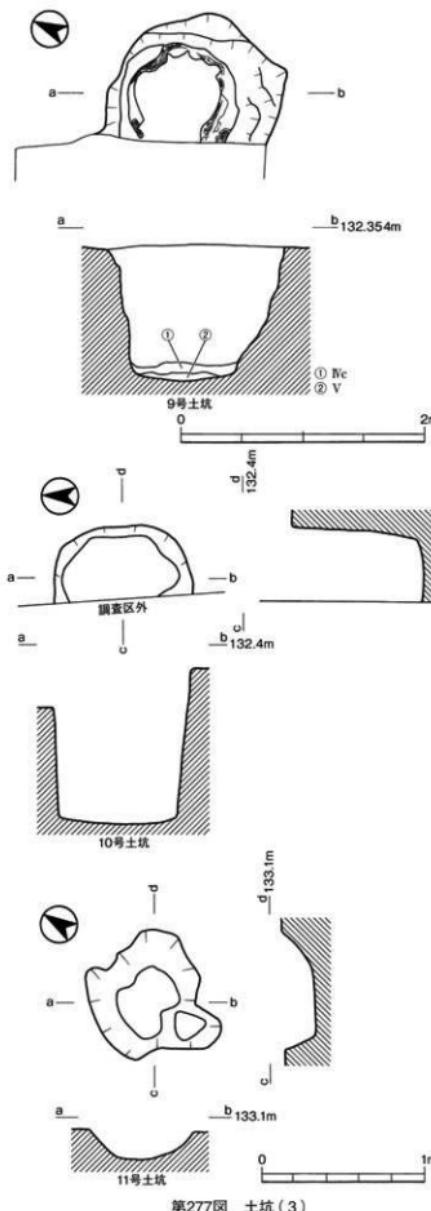
第276図 土坑(2)

第66表 土坑観察表(2)

土坑名	直径 (cm)	短軸 (cm)	形状	深さ (標高より) cm	備考
16号	80	70	円	8	—
17号	140	130	円	12	—
18号	90	66	楕円	16	—
19号	134	85	圓丸方形	46	—
20号	84	82	楕円	25	—
21号	76	68	楕円	24	—
22号	112	104	楕円	42	—
23号	80	80	楕円	36	—
24号	110	100	楕円	28	—

第67表 土坑墓内出土遺物観察表

検出	遺構	番号	出土区	器種	部位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整・文様		色調		備考
									外面	内面	外面	内面	
262	土坑墓2	1	C-33	壺	口縁部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	黒	黒	漆器
		3	C-33	壺	胴部	—	—	—	格子目タキ	ナデ	黒	黒	漆器
		4	C-33	杯	底盤	—	5.2	—	ロクロナデ	ロクロナデ	に赤い黄褐	に赤い黄褐	土師器
		5	C-33	壺	胴部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	オリーブ灰	オリーブ灰	白磁
264	土坑墓3	1	C-33	壺	口縁部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	黒	黒	漆器
266	土坑墓4	1	C-33	壺	口縁部	1B	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	明オリーブ灰	明オリーブ灰	白磁
269	土坑墓6	1	B-35	壺	胴部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	白磁
検出	遺構	番号	出土区	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考			
262	土坑墓2	2	C-33	石鍋	造石	4.3	5.8	1	29.2	—			



第277図 土坑(3)

ピット内遺物(第283図 1~16)

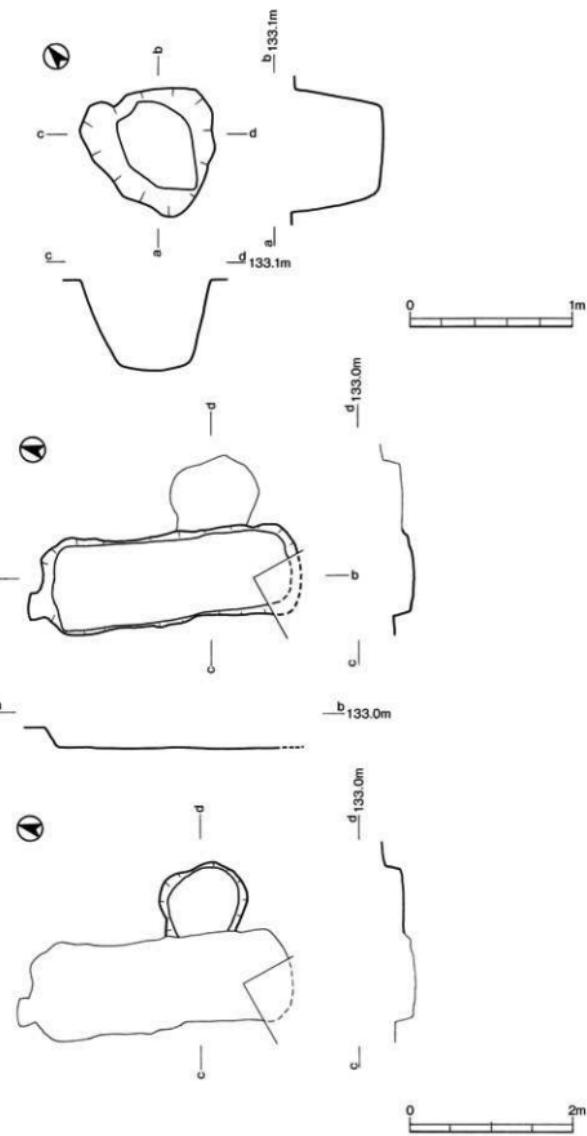
本遺跡の中世時期のピット内から、様々な遺物が出土した。この中には、古代の須恵器も混入していた。接合作業を経て16点を図化した。1~7は須恵器である。このうち1・2は甕である。外面には比較的繊細な格子目状タキ痕が、内面には明瞭な同心円状アテ具痕がみられる。

3は残存部内面の最上部に製作時に頸部を貼りつけたときにできたとみられる盛り上がりがあるので、壺かあるいは平瓶であると考えられる。これらの須恵器はいずれも古墳時代の後半期の被覆式の時期から古代初期に該当するものと考えられる。時期は7世紀以降が想定される。4~7は蓋である。4は口縁部の屈曲がやや弱いもので、口縁端部は下方に突出する。6は口縁部が直線的に斜上方にのびる。端部は丸くおさめる。7は4と同様に口縁部の屈曲がやや弱く、口縁端部は下方に突出する。ただし、4と比較して突出が弱い。4は8世紀中頃で、5~7はそれ以前に該当すると考えられる。

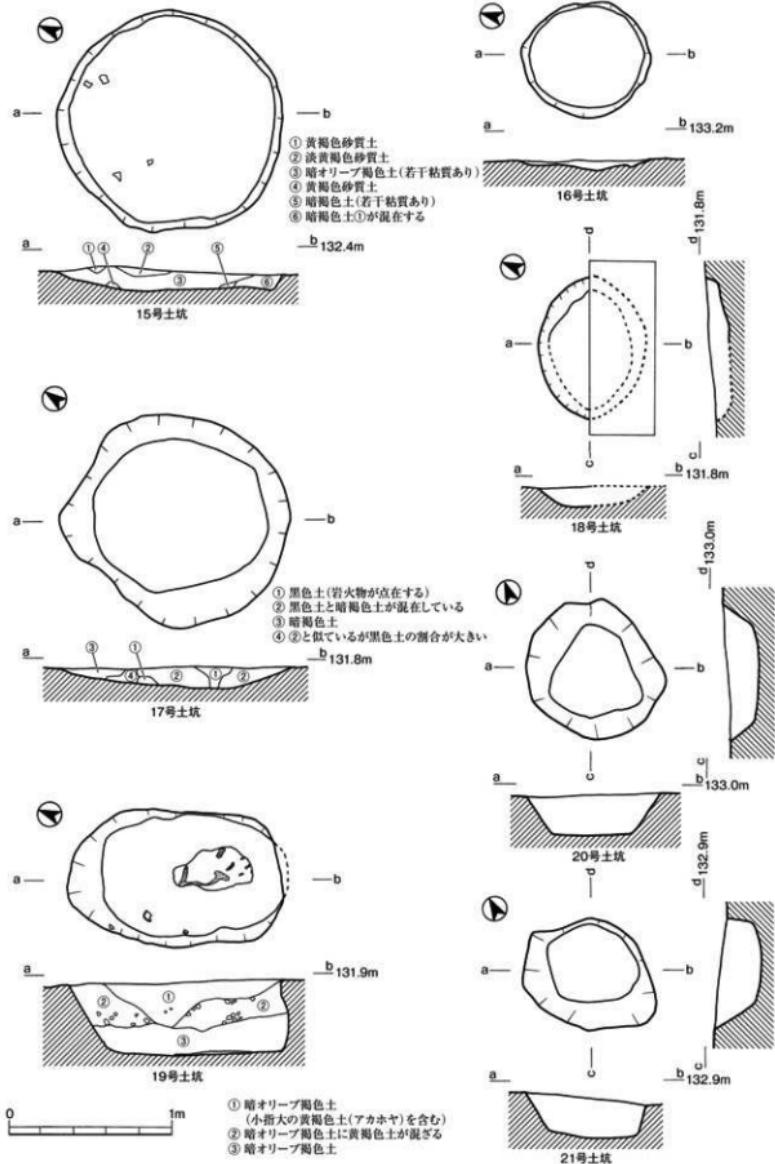
8は東播磨系須恵器の片口鉢の口縁部である。口縁部外面には自然釉が付着する。9・12・16は土師器である。12と16は底部に糸切り痕がみられる。これらは、いずれも中世のものである。

10は陶器あるいは須恵器の底部である。中世のものとみられるが、古代の可能性もある。器種は、小壺か鉢であると考えられる。

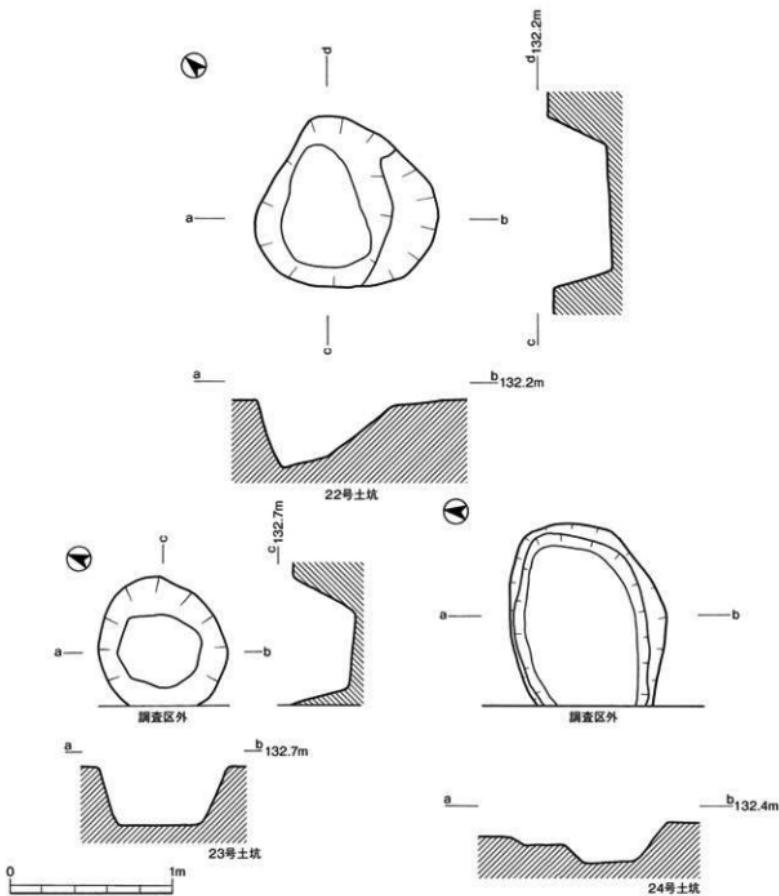
11・13~15は青磁である。11は、外面に線蓮弁文がある。上田分類の碗B IV類に該当し、14世紀以降である。14は口縁部が外反する壺で、太宰府編年による龍泉窯青磁のIII類かIV類に該当する。15は見込み部に片彫割花文を有する碗である。龍泉窯青磁IV類と考えられ、14世紀以降の可能性がある。



第278図 土坑(4)



第279図 土坑 (5)



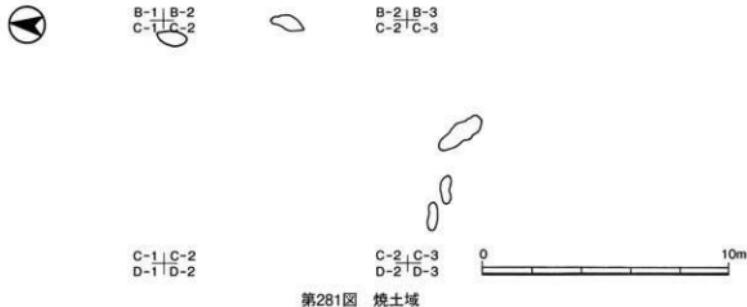
第280図 土坑(6)

焼土域(第281図)

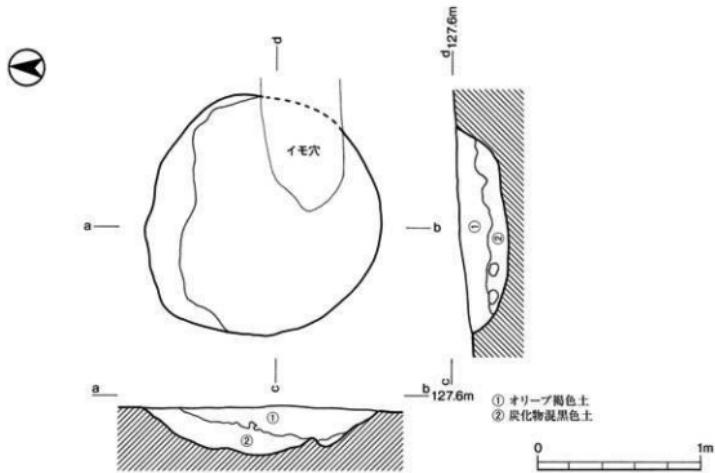
B～D-1～3区、Ⅲa層で焼土域が検出された。この焼土域には炭化物はまばらに混入しており、全体的に黒色化している部分が多くた。遺物は出土しなかったが、検出面から時期は中世以降であると判断した。

焼土土坑(第282図)

C-28区、Ⅲa層で検出された。この土坑の形状は、径約145cmの円形で検出面からの深さは、約30cmである。土坑の底部より炭化物黒色土が検出されたことから、焼土土坑とした。



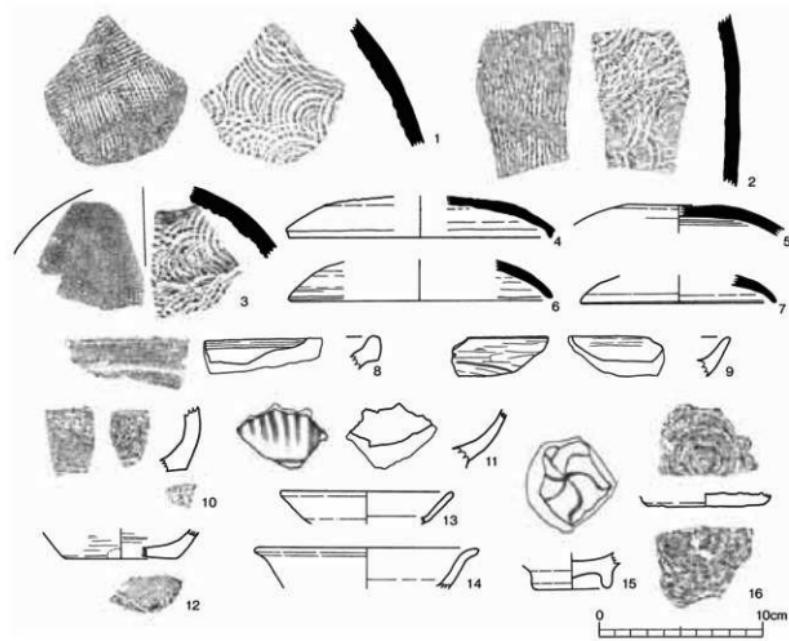
第281図 焼土域



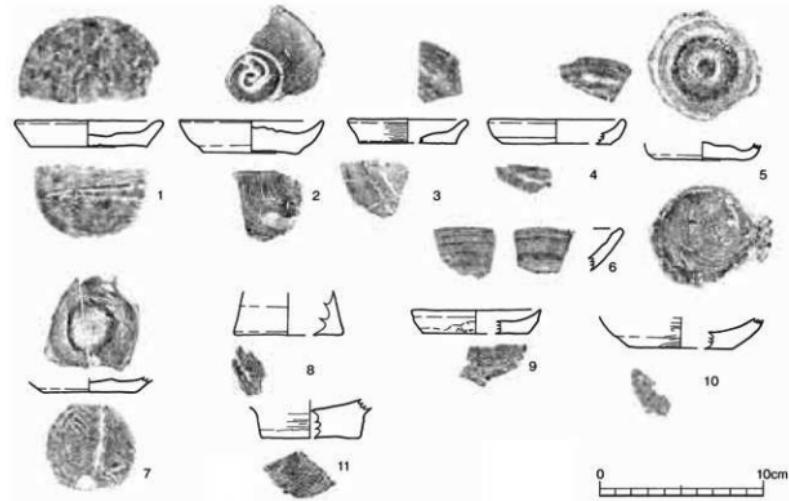
第282図 焼土坑

第68表 ピット内出土遺物観察表

件番	番号	器種	部位	口径・底径・高さ			調整・文様		色調		備考
				口径 cm	底径 cm	高さ cm	外面	内面	外面	内面	
283	1	甕	胸部	—	—	—	格子目とタキ	同心円当て具痕	灰褐色	灰褐色	焼土器
	2	甕	胸部	—	—	—	格子目とタキ	同心円当て具痕	灰褐色	灰褐色	焼土器
	3	甕	胸部	—	—	—	格子目とタキ	同心円当て具痕	灰褐色	灰褐色	焼土器
	4	甕	—	16.3	—	—	回転ハラケズリ	ハケメ	灰褐色	灰褐色	焼土器
	5	甕	—	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	焼土器
	6	甕	—	16.6	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	焼土器
	7	甕	—	12.1	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	焼土器
	8	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	焼土器
	9	小皿	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にかい橙	にかい橙	須惠器、口縁部のみ自然釉
	10	小皿・鉢?	胸~底部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	土鏡器、未切り
	11	碗	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	オリーブ灰	オリーブ灰	青釉
	12	小皿	底部	—	6.9	—	ナデ	ナデ	根	根	土師器、未切り、柱高台をもつ
	13	碗	口縁~底部	—	10.6	—	ナデ	ナデ	オリーブ	オリーブ	青釉
	14	小皿	口縁~底部	14	—	—	ナデ、縫合付	ナデ	オリーブ	オリーブ	青釉
	15	碗	底部	—	4.6	—	ナデ、縫合付	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	青釉
	16	小皿	底部	—	4.5	—	ナデ	ナデ	にかい黄橙	にかい黄橙	土師器、未切り



第283図 ピット内遺物



第284図 土器

中世土師器 (第284図 1~11)

いずれも底部は糸切りである。1~5、8、9、11は小皿である。1は底部に板状压痕がみられる。2は底部が厚い。8・11は柱状の高台を持つ。県内では類例が少ない。7は内面見込みに縱方向にナデを施した痕跡が認められる。6・10は坏である。6は口縁部外面が、10は内面が黒色化する。瓦質土器の可能性もある。以上の土師器は、おおむね中世前半の時期に該当するものと考えられる。

東播磨系須恵器・瓦質土器・国産陶器 (第285図 1~21)

1~3は東播磨系須恵器片口鉢の口縁部である。口縁端部内面が凹み上方へ拡張されたもので、14世紀前半~15世紀前半のものに類似する。特に、1は口縁部外面に明瞭な自然軸が付着する。

4~9は瓦質土器である。4~8は擂鉢である。4は口縁端部が玉縁状を呈し片口部を持つ。調整は粗い。内面には横方向のハケメが施される。本遺跡出土の東播磨系片口鉢に類似する。5~7は、口縁端部がやや拡張され断面が台形・三角形のもので、11世紀後半~12世紀代頃の東播磨系片口鉢の口縁部に類似する。内面にはハケメとスリ目が施される。8は端部が断面方形で、直線的な体部を持つ。内面にはハケメが施される。9は甕である。口縁部のみの残存である。以上の瓦質土器は、東播磨系須恵器の片口鉢を模倣して製作された在地品であると考えられる。

14~17は、常滑焼の甕である。14・15は口縁部が玉縁状を呈する。16・17は胴部である。特に、17は肩部付近に花形のスタンプが施される。これらは、備前焼にも類似する特徴を持つので備前焼の可能性もある。10~13・18・19は備前焼の擂鉢である。10~12は口縁部、13・18は胴部、19は底部である。この中で、11だけが残存部分にスリ目がみられないもので、Ⅲ期（鎌倉時代後半期）に該当する。底部付近だけにスリ目が施されるものか、スリ目が少ないのであるかもしれない。他の備前焼は、おおむねⅣ期（14世紀中頃~15世紀）に該当する。

青磁 (第286図 1~22)

1・19は12世紀中頃~後半に該当する。1は口縁部内面に一条の沈線が巡る。19は同安窯系皿I類である。2・5・6・8・19~22は13世紀前半のものである。2・5・6・8は鎬蓮弁文碗である。14は坏（I~5類）である。3・18は13世紀中頃~14世紀初頭の坏である。7・9~13・16・17は14世紀初~15世紀前半頃の碗である。7は胎土が粗悪である。9・13は線蓮弁文碗である。11は内面に草花文がある。12は外面上に格子状文のある皿である。16は二次焼成を受けている。15は皿か瓶の口縁部である。13世紀~15世紀前半頃のいずれかに該当する。

青花 (第286図 23~32)

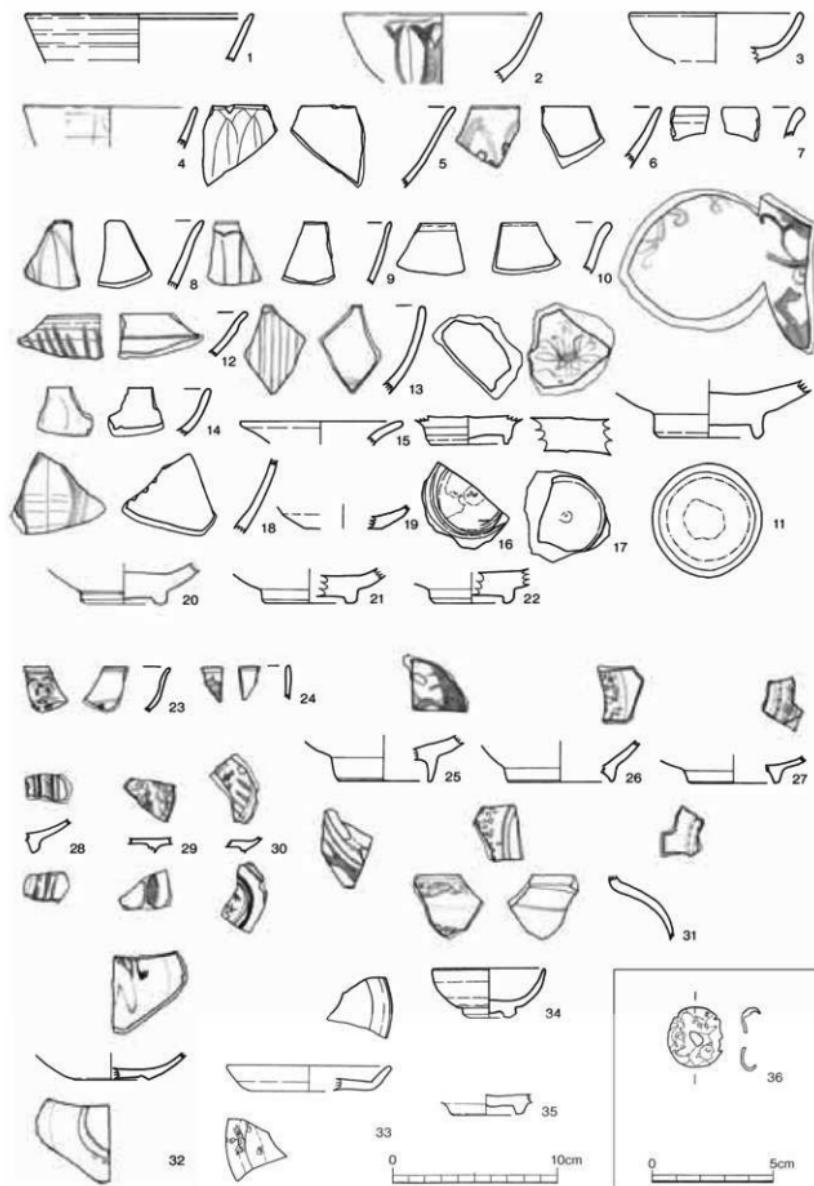
23・25~31は青花である。25は大皿II類に該当する。23・26~31は皿である。30は底部外面に大と年の文字が描かれる。これらのほとんどは景德鎮窯産であるが、27と28は漳州窯系の可能性がある。32は15世紀後半~16世紀前半頃のもので葵筋底である。見込みに「福」の文様を描く。31は胴部が球形に張る壺である。渦巻きを横位に並べたような文様を外面上に描く。

その他 (第286図 33~36)

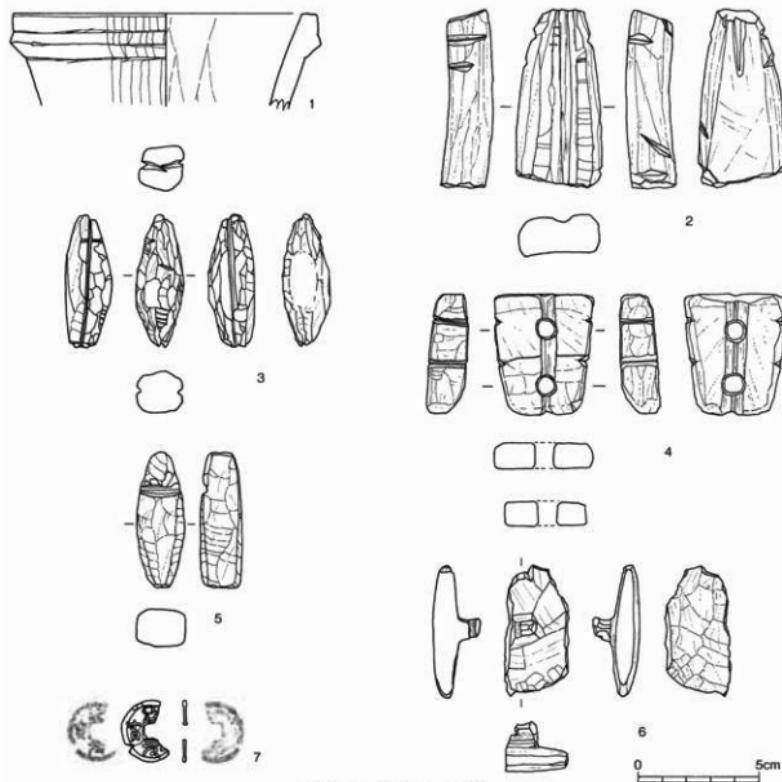
33・34は白磁の皿である。33は底部の釉を施釉した後に削り取る。この特徴から13世紀初頭~前半頃の皿（皿I~1'類）と考えられる。34は森田分類のD群（15世紀）に該当する。35は肥前唐津焼に類似する碗か皿である。底部外面は無釉である。朝鮮王朝の陶器の可能性もある。



第285図 東播磨系須恵器・瓦質土器



第286図 青磁・青花・その他



第287図 滑石製品・古銭

36は青銅製品で、器壁の厚みは1~1.5mm程度である。また、製品としてみた場合は直径2.4cmで最大厚が0.7cmとなる。土坑墓内出土遺物であるが、いずれの遺構からのものかは不明である。中央部には孔がある。用途は明らかでない。

滑石製品・古銭(第287図 1~7)

1~6は滑石製品である。1は石鍋の口縁部で、つば状突起が口縁に近接して巡る。2~5は石鍋再加工品で、一部に切り込みや穿孔が入る。3・5は石製沈子(石錘)で、6は「バレン状石製品」とされるものである。7は、一部が欠損しているが、篆書体の「聖宋元寶」(初鑄1101年)の可能性がある。

第69表 中世出土遺物観察表(1)

件名	番号	出土区	層位	石材	最大長			重量	備考	件名	番号	出土区	層位	石材	最大長			重量	備考
					cm	cm	cm								cm	cm	cm		
287	1	B-22	II b	石鍋	4.3	5.8	1	29.2	滑石	287	5	C-24	III a	鍤	5.5	2	2	28.33	滑石
	2	B-30	II b	鍤	7.3	1.9	2.1	83.92	滑石		6	B-20	II	バレン状石製品	5.4	2.6	1.9	21.1	滑石
	3	C-24	II b	鍤	5.4	1.9	2	23.68	滑石		7	D-25	—	古銭	2.4	—	—	—	—
	4	B-C-31	—	鍤	5	4.1	1.1	48.62	滑石										

第70表 中世出土遺物觀察表(2)

件名	番号	出土区	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		備考
									外面	内面	外面	内面	
284	1	C-23	II a	土師器	皿	9	7.2	1.6	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	2	B-23	II a	土師器	皿	8.8	5.8	2	ナデ・指オサエ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	3	D-22	II b	土師器	皿	7.4	6	1.4	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	4	C-34	I b	土師器	皿	8.2	6.6	1.5	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	5	C-32	II b	土師器	皿	—	6.4	—	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	6	B-24	II b	土師器	皿	—	—	—	ナデ	ナデ	黑緋	明黄緋	—
	7	C-33	II a	土師器	皿	—	5.7	—	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	8	C-20	II b	土師器	皿	—	7.1	—	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	9	B-42	II b	土師器	皿	7.9	4.4	1.4	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—
	10	C-23	II b	土師器	皿	—	6.3	—	ナデ	ナデ	明黄緋	明黄緋	—
	11	D-22	II b	土師器	皿	—	6	—	ナデ	ナデ	黄緋	黄緋	—

第71表 中世出土遺物觀察表(3)

件名	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考		件名	番号	出土区	層位	種別	器種・分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考			
									外	内									外	内			
285	1	C-31	II a	青磁盤系 青磁器	片口鉢	—	—	—	—	—	286	8	B-21	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	2	B- C-33	III a	青磁盤系 青磁器	片口鉢	—	—	—	—	—		9	B-25	II b	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	3	C-32	—種	青磁盤系 青磁器	片口鉢	—	—	—	—	—		10	B-22	I b	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	4	B-20 21	I b	瓦質土器	壺鉢	33	—	—	—	—		11	C-35	I b	青磁	碗	—	7.8	—	—	—	—	—
	5	B-33	II a	瓦質土器	壺鉢	—	—	—	—	—		12	C-21	II a	青磁	皿	—	—	—	—	—	—	—
	6	B-33	II a	瓦質土器	壺鉢	—	—	—	—	—		13	C-22	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	7	B-24	II b	瓦質土器	壺鉢	—	—	—	—	—		14	A-25	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	8	B-24	II b	瓦質土器	壺鉢	—	—	—	—	—		15	B-20	I b	青磁	碗	10	—	—	—	—	—	—
	9	C-34	—	瓦質土器	壺	—	—	—	—	—		16	C-30	III b	青磁	碗	—	4.8	—	—	—	—	—
	10	B-36	N	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		17	B-21	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	11	C-34 35	II a	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		18	B-23	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—	—	—
	12	D-25	II a	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		19	B-25	II b	青磁	碗	—	4.6	—	—	—	—	—
	13	B- C-33	III a	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		20	B-34	II a	青磁	碗	—	5.8	—	—	—	—	—
	14	C-24	II a	常滑	皿	—	—	—	—	—		21	C-24	I b	青磁	碗	—	5.2	—	—	—	—	—
	15	C-24	I b	常滑	皿	—	—	—	—	—		22	C-25	I b	青磁	碗	—	4.6	—	—	—	—	—
	16	C-33 34	II b	常滑	皿	—	—	—	—	—		23	C-23	II a	青花	皿	—	—	—	—	—	—	—
	17	B-24	II a	常滑	皿	—	—	—	—	—		24	B-21	II a	青花	皿	—	—	—	—	—	—	—
	18	B-20	II	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		25	—	—	青花	大皿	—	5.6	—	—	—	—	—
	19	B-24	I b	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		26	C-22	II a	青花	皿	—	6.4	—	—	—	—	—
	20	C-22	II b	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		27	B-20	II b	青花	皿	—	5.6	—	—	—	—	—
	21	B-18	II b	陶器	壺鉢	—	—	—	—	—		28	B-19	I b	青花	皿	—	—	—	—	—	—	—
	1	D-25	II b	青磁	碗	18.8	—	—	—	—		29	C-20	I b	青花	皿	—	—	—	—	—	—	—
	2	C-35	I b	青磁	碗	12	—	—	—	—		30	C-23	II a	青花	皿	—	—	—	—	—	—	—
	3	B-19	II a	青磁	碗	10.6	—	—	—	—		31	D-22	I b	青花	—	—	—	—	—	—	—	
	4	B-34	I b	青磁	碗	10.4	—	—	—	—		32	B-34	I b	白磁	皿	—	4.6	—	—	—	—	—
	5	C- D-24	—	青磁	碗	—	—	—	—	—		33	B-35	I b	白磁	皿	10	7.3	—	—	—	—	—
	6	B-24	II a	青磁	碗	—	—	—	—	—		34	C-24	I b	—	皿	6.8	2.6	3.1	—	—	—	—
	7	C-24	I b	青磁	碗	—	—	—	—	—		35	C-24	I b	陶器	桃か皿	—	4.4	—	—	—	—	—

件名	番号	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				cm	cm	cm		
286	36	—	青磁製品	2.4	1.5	0.7	267	—

天神平溝下遺跡

第V章 天神平溝下遺跡

天神平溝下遺跡の調査は、道路新設工事図面のSTA177とSTA180を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成15年度に確認調査を行い、平成16年度に本調査を行った。

第1節 縄文時代の調査

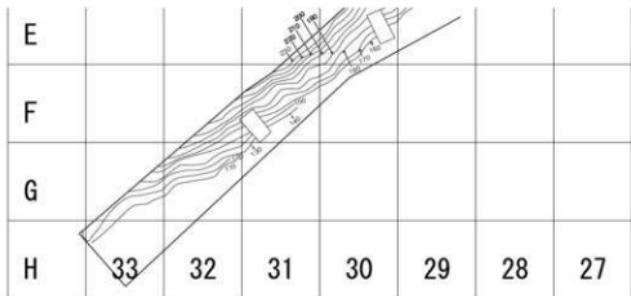
1 概要

縄文時代の調査は、Ⅲc層のアカホヤ火山灰一次堆積層を時代区分の基準として行った。アカホヤ火山灰と、薩摩火山灰層の間にある、Ⅳ層・V層を縄文時代早期とした。Ⅲb層より上の層を縄文時代晚期以前とした。縄文時代晚期から古墳時代に該当する遺物包含層から出土する土器の形式が層と合っていないことから、何らかの影響で攪乱を受けたものと考えられる。

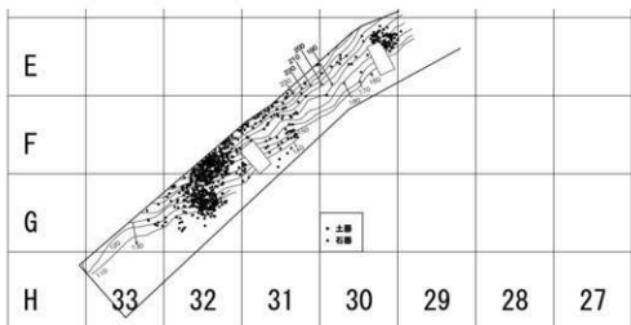
2 遺構

遺構は、集石が4基、土坑が1基、焼土域が1基検出された。

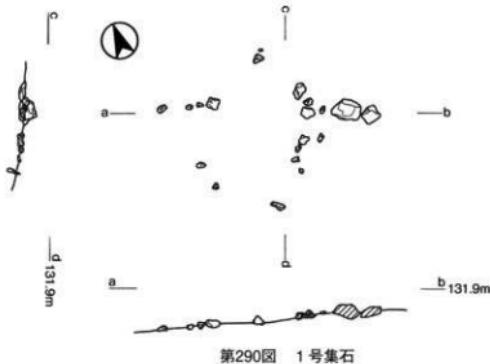
遺物は、磨削縄文土器、市来式土器が出土した。



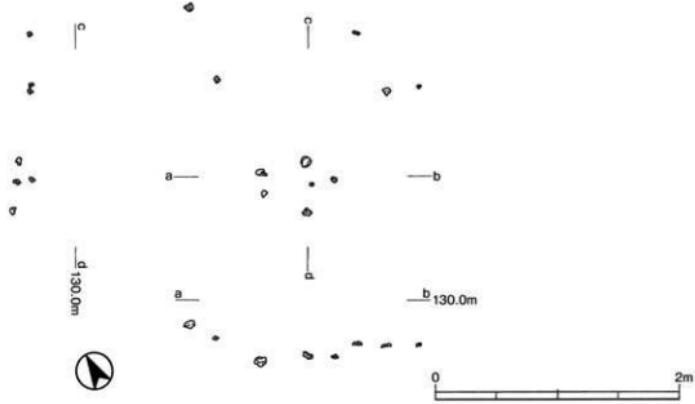
第288図 縄文時代地形図 1:625



第289図 縄文時代遺物出土状況図 1:625



第290図 1号集石

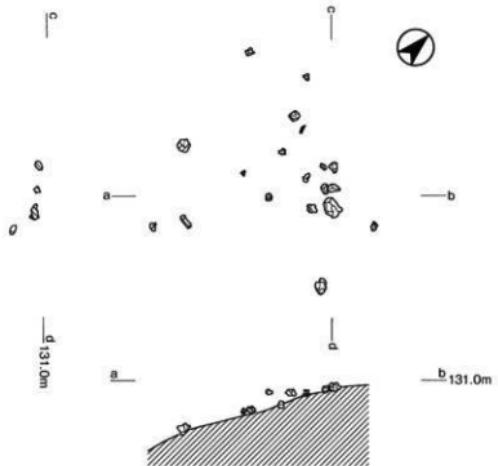


第291図 2号集石

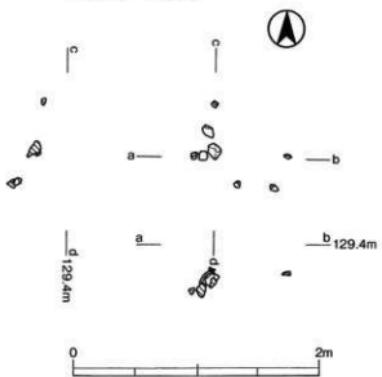
集石

1号集石（第290図）は、G・H-33区、IIIb層で検出された。約182cm×約132cmの範囲に20個の大小の角礫が集中していた。礫にはまとまりは見られず散逸した状態である。約2m間のなだらかな傾斜面上にあり、石材は安山岩である。礫は最大のものは約25cmで、最小のものは約3cmで、5cm～10cmの大きさのものが多い。礫間のレベル差は約20cmである。

2号集石（第291図）は、B-26区、IV層上面で検出された。約222cm×約210cmの範囲に11個の大小の角礫が集中していた。礫にはまとまりは見られず散逸した状態である。約2m間の急な傾斜面上にある。石材は安山岩である。礫は最大のものは約10cmで、最小のものは約3cmで、5cm～10cmの大きさのものが多い。礫間のレベル差は約40cmである。同区の同じ層から、台石、石斧の破片が出土している。



第292図 3号集石



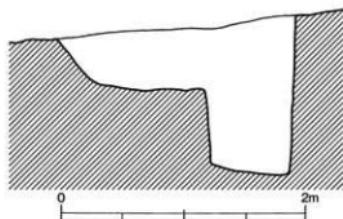
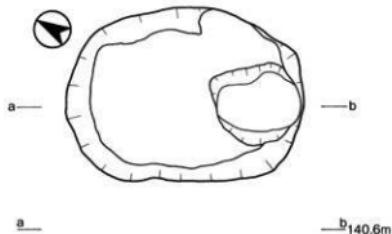
第293図 4号集石

第72表 繩文時代集石観察表

碑名	遺構名	検出区	層	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	枚数(個)	備考
290	1号集石	G・H-33	III b	182	132	22	20	礫の密集性が強く、崩れた状態である。
291	2号集石	B-26	IV	222	210	38	11	礫の密集性が強く、崩れた状態である。
292	3号集石	B・C-26	III b	202	180	42	19	礫の密集性が強く、崩れた状態である。
293	4号集石	B-26	III b	86	74	32	9	礫の密集性が強く、崩れた状態である。

3号集石（第292図）は、B・C-26区、III b層で検出された。約202cm×約180cmの範囲に19個の大小の角礫が集中していた。礫にはまとまりは見られず散逸した状態である。約2m間の急な傾斜面上にあり、石材は安山岩である。礫は最大のものは約30cmで、最小のものは約3cmで、5cm～10cmの大きさのものが多い。礫間のレベル差は約40cmである。

4号集石（第293図）は、B-26区、III b層で検出された。約86cm×約74cmの範囲に9個の大小の角礫が集中していた。礫にはまとまりは見られず散逸した状態である。約1m間の急な傾斜面上にあり、石材は安山岩である。礫は最大のものは約13cmで、最小のものは約5cmで、5～10cmの大きさのものが多い。礫間のレベル差は約30cmである。



第294図 縄文土坑

第73表 縄文時代土坑観察表

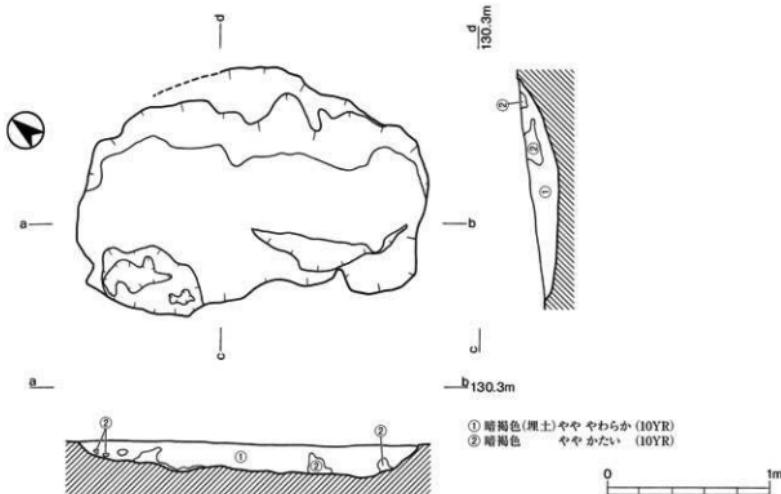
番号	遺構	検出区・層	長軸	短軸	深さ
294	縄文土坑1	飛び地	196	145	50~130

土坑

柱穴はない。南側に長軸約196cm、短軸約145cm、深さ130cmの円形の土坑がある。床面は深さ50cmと130cmの面に二分される。出土遺物はなかった。

第74表 縄文時代焼土域観察表

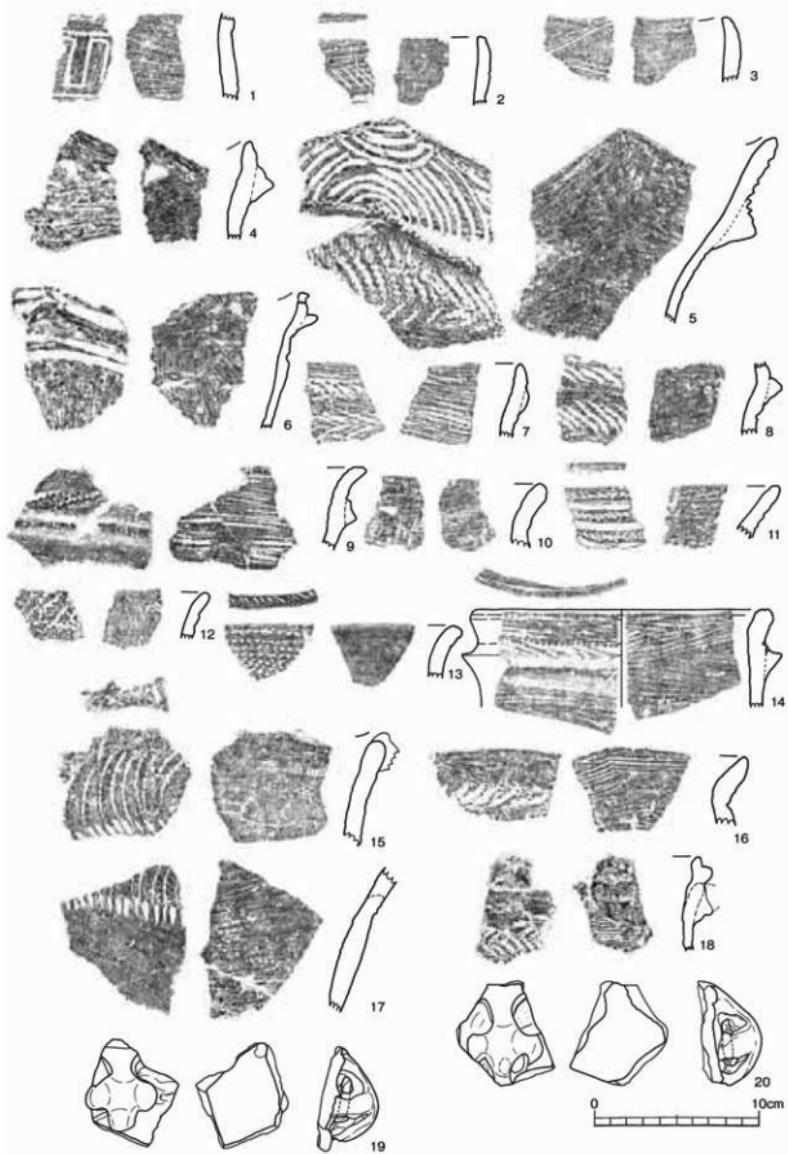
番号	遺構	検出区・層	長軸	短軸	換算深度
295	焼土域	AB-26・Ⅲ	210	140	20



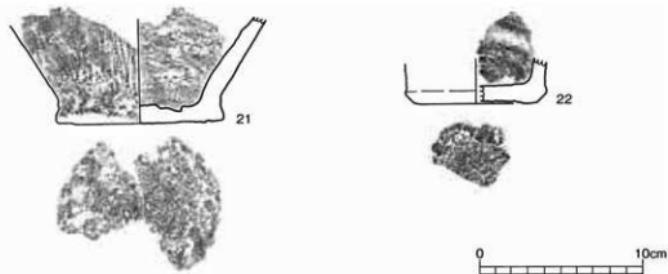
第295図 焼土域

焼土

埋土の大部分は、暗褐色土で少しやわらかい。埋土中には炭化物と砂が含まれる。床は、部分的に焼けて黒くなっている。出土遺物はなかった。



第296図 繩文土器(1)



第297図 繩文土器(2)

縩文土器(1)・(2)(第296図・297図 1~22)

1は絞られた頸部からやや張った肩部にあたる。文様はクランク形の沈線及び平行沈線と磨消繩文である。色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。2は肥厚し、内弯した口縁部である。文様は斜位の細い沈線を施し、下位に横位の沈線がみられる。器面調整は内外面とも横ナデである。色調は外面が黒褐色で内面が茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。3は肥厚し、内弯した口縁部である。文様は斜位の細い沈線と貝殻刺突文がみられる。器面調整は内外面とも研磨調整である。色調は外面が茶褐色で内面が黒茶褐色である。胎土は金雲母、石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。

6は外反する山形口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯と横位の沈線である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。5は外反する山形口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯があり、上部に重ねた曲線を横位の沈線、下部に斜位の貝殻腹縁刺突文を施している。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は外面が赤褐色に煤による黒色があり、内面は赤茶褐色である。胎土は金雲母、石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。4は外反する山形口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯と横位の貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は外面が赤褐色、内面が暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。7は肥厚し、外反した口縁部である。文様は斜位の沈線と貝殻刺突文がみられる。器面調整は内外面とも貝殻条痕である。色調は外面が茶褐色で内面が黒茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。9は外反する口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯と斜位の貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。8は外反する口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯の上と下に斜位の貝殻刺突文を施したものである。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。11は外反する口縁をもつ土器である。文様は沈線と貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は金雲母、石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。14は外反する口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯と斜位の貝殻刺突文である。器面調整

は貝殻条痕である。色調は内外面とも灰赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。10は外反する口縁をもつ土器である。文様は2段に張り出した断面三角突帯と斜位の貝殻刺突文である。器面調整は貝殻条痕である。色調は内外面とも灰赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。13は外反する口縁をもつ土器である。文様は斜位の横位の貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。12は外反する口縁をもつ土器である。文様は斜位の貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。15は口縁部に瘤を付けたやや外反する器形の土器である。文様は貝殻腹縁部による刺突文を縦位に施している。器面調整は横ナデ調整である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。17は15と同一個体と思われ下位に当たる。16は頸部で締まり、外反する口縁をもつ土器である。文様は斜位の貝殻刺突文である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は外面は煤による黒色で、内面は赤褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。18は口縁部に瘤を付けたやや外反する断面三角形の土器である。文様は貝殻腹縁部による刺突文を斜位に施している。器面調整は貝殻条痕である。色調は内外面とも赤茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。20と19は十字にブリッジを架けた瘤状の突起である。器面調整は丁寧なナデで、色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。21は平底の底部である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。22は平底の底部である。器面調整は簡単なナデ調整である。色調は内外面とも茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。

第75表 繩文時代包含層出土土器觀察表

神宮	番号	出土区	層位・遺構	基種	部位	口径・底径・高さ			調整・文様		色調		胎土	備考
						cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
	1	B-27	III b	深鉢	頸部	-	-	-	貝殻条痕	茶褐	灰茶褐	石英、長石、角閃石		摩消窓文系
	2	A-25	II b	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式
	3	C-6	土手	深鉢	口縁部	-	-	-	ミカキ	ミカキ	茶褐	黒茶褐	石英、長石、角閃石、金雲母	市来式
	4	C-6	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式、貝殻条痕
	5	F-31	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石、金雲母	三重突、貝殻条痕
	6	-	土手	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	三重突
	7	A-25	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕	茶褐	黒茶褐	石英、長石、角閃石		沈維貝殻刺突文
	8	A-25	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	三重突、貝殻刺突文
	9	F-31	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	三重突、貝殻刺突文
	10	21T	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻刺突文	ナデ	明赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	沈維貝殻刺突文
296	11	F-31	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石、金雲母	市来式
	12	B-27	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	石板式、貝殻刺突文
	13	B-25	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻刺突文	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	石板式
	14	C-6	III o	深鉢	口縫-頸部	10	-	-	貝殻条痕	貝殻条痕	明赤褐	明赤褐	石英、長石、角閃石	市来式
	15	A-6	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式
	16	C-7	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	貝殻条痕	茶	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式
	17	C-6	III o	深鉢	頸部	-	-	-	貝殻刺突文	ナデ	茶褐褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式
	18	B-26	III o	深鉢	口縁部	-	-	-	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式、貝殻刺突文
	19	A-26	III o	深鉢	肩部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	瘤状突
	20	A-26	III o	深鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	瘤状突
297	21	A-25	III o	深鉢	底部	-	7.8	-	ナデ	ケシリ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式
	22	B-6	III o	深鉢	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	茶褐	茶褐	石英、長石、角閃石	市来式

包含層出土の石器

縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層であるⅢ層から石器が8点出土した。

1は安山岩を用いた打製石鎌である。頭部が欠損している。側辺は脚部に向かって直線的であるが、右側辺と左側辺の中央部に膨らみをもつ。脚部は鋭く深い抉りをもつ。

2はチャートを用いた微細剥離痕剥片である。裏面には主要剥離面を残す。右側辺に打点が残る。

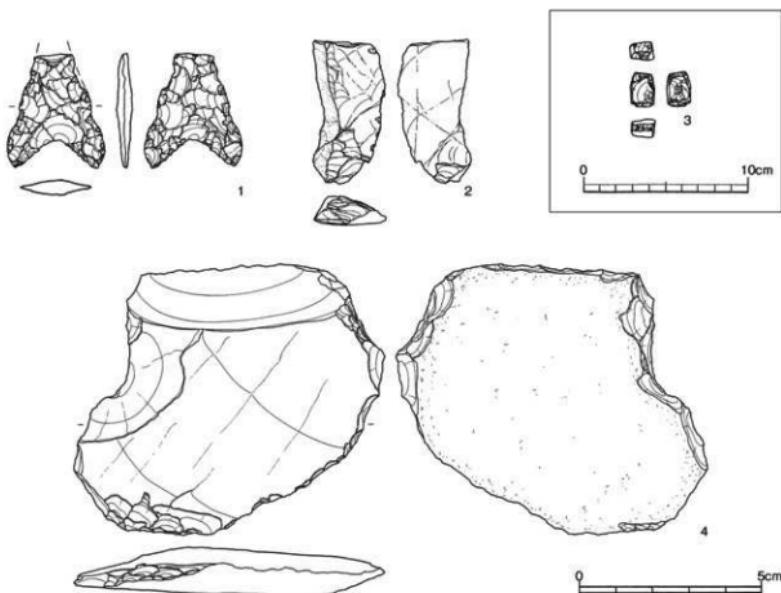
4はホルンフェルス製のスクレイパーである。磨製石斧の二次使用の可能性がある。右側辺と左側辺ともに刃部へ向かって緩やかに外弯している。刃部はやや鋭く、表面から調整剥離を残す。

5はホルンフェルスを用いた礫器である。打製石斧の上部と下部が欠損した物を二次使用した可能性がある。右側辺と左側辺に表裏から大まかな調整剥離によって作られている。

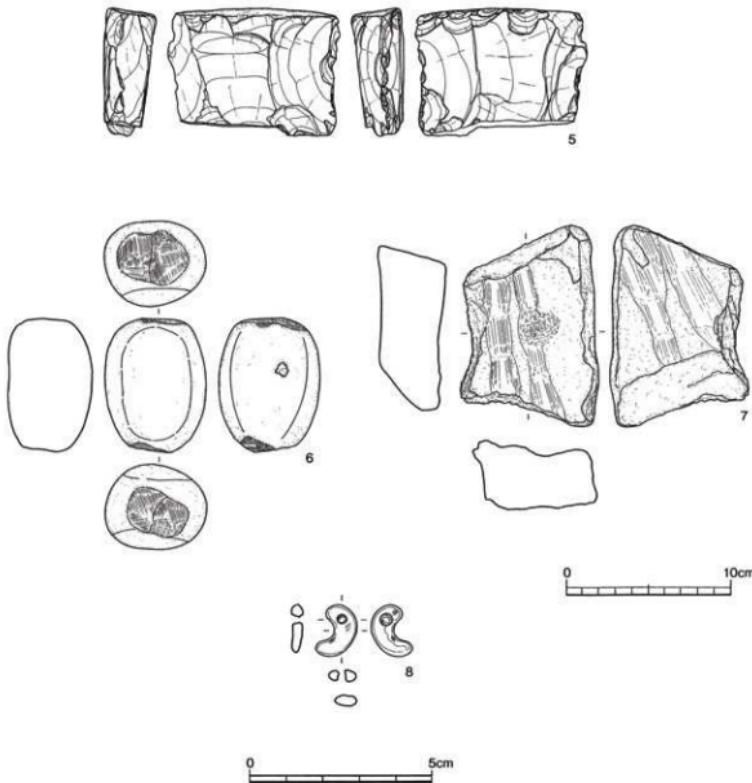
6は砂岩を用いた磨石・敲石である。卵形をしていて裏面の中央にわずかな凹みがある。上部と下部は敲打による使用で欠損したと考えられる。表面と裏面にわずかな磨痕がみられる。

7は目の粗い砂岩を用いた砥石である。縦約12cm横約9cmで小さい。表面は台形をしている。下半分が欠損したとも考えられる。中央部に溝状を呈する使用痕が残る。

8は石製錘飾品（勾玉）である。石材は不明である。小指のツメ程度の大きさで、緑灰色を呈する。全面丁寧に研磨され、上部に穿孔がある。



第298図 包含層出土の石器(1)



第299図 包含層出土の石器(2)

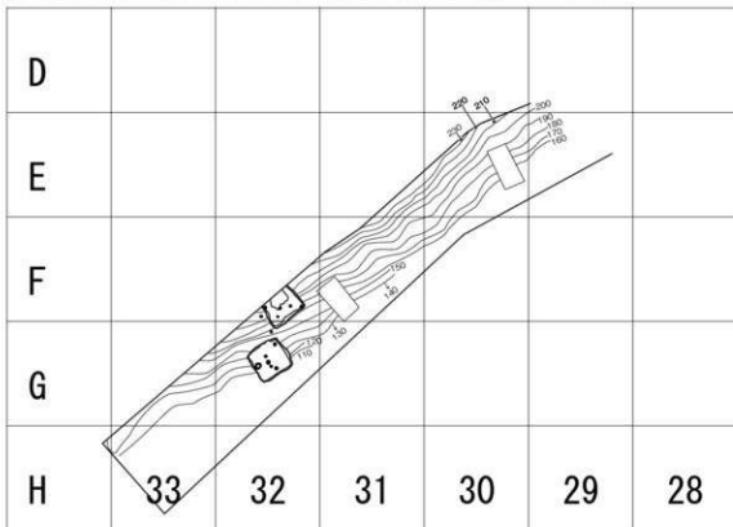
第76表 繩文時代晩期～古墳時代包含層出土石器観察表

辨別	番号	器種	石材	区	層	最大長			重量	備考
						cm	cm	cm		
298	1	打製石器	安山岩	B26	III b	3.1	2.7	0.4	2.44	—
	2	復縫刃磨痕片	チャート	B26	II	3.9	2	0.8	6.53	—
	3	石核	黒曜石	A26	II	2.1	1.5	1.1	3.82	—
	4	スクレイパー	ホルンフェルス	A26	III a	7.4	8.6	1.3	90	—
299	5	研器	ホルンフェルス	C26	III a	7.8	10.6	3.3	360	—
	6	磨石	砂岩	F32	III a	8.3	6.2	5.2	390	—
	7	砥石	砂岩	C27	III a	12.4	8.5	4.3	550	—
	8	垂熱品	不明	B26	II	1.5	1.4	0.3	0.5	—

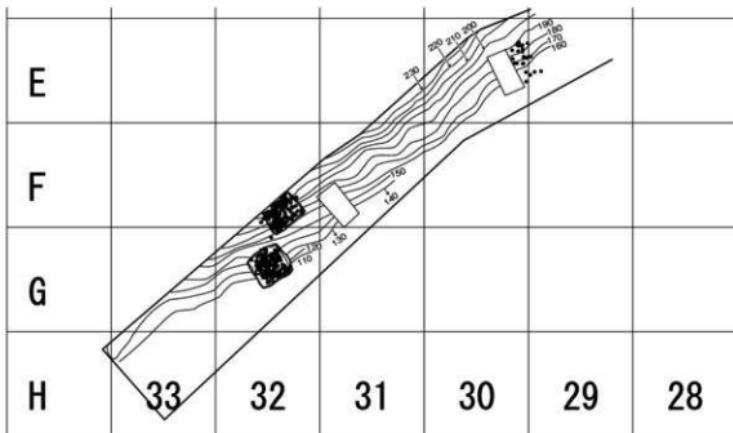
第2節 古墳時代の調査

1 概要

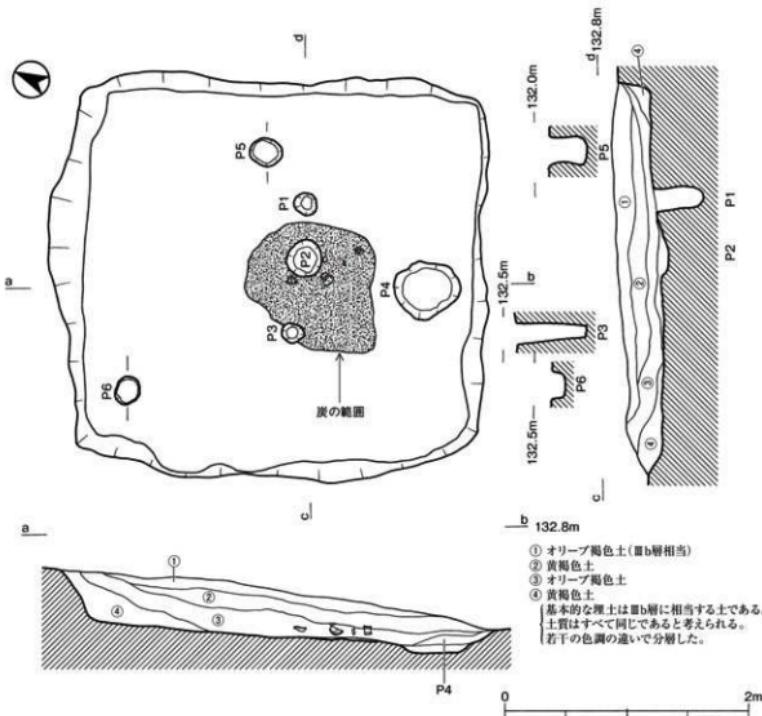
古墳時代の層は、Ⅲa層に該当する。遺構は、竪穴建物跡2基が検出された。遺物は、成川式土器、石製錘飾品が1点出土した。土器の器種は、甕・壺・高杯などである。



第300図 古墳時代遺構位置図 1:500



第301図 古墳時代遺物出土状況図 1:500



第302図 1号竪穴住居跡

2 遺構

1号住居跡

1号住居は、G-32区、Ⅲa層で検出された。形状は、長軸約354cm×短軸約324cm、検出面から床面までの深さは約44cmの方形の竪穴建物跡である。住居の床面と思われる硬化面が残存していた。床面直下から6基のピットが検出された。P2・4以外は、長軸の大きさが同じぐらいである。P1・3・5は、深さが深い。P2・4は、深さが浅い。ピット間の距離は、約20cm～約150cmと一定ではない。P3には、炭が混じった土が広がっている範囲があり、米粒大の炭化物が点在していた。P2には炭化物が点在していた。P1～3は直線上に並ぶ。遺物は成川式の土器と微細剥離痕薄片が出土し、接合作業等を経て土器6点を図化した。